



目次

医学部新入生の皆さんへ..... 2  
 新入生へのメッセージ：看護学を学ぶあなたへ..... 3  
 新入生へのメッセージ「正しい知識をアップデートしよう」..... 4  
 大学院新入生の皆様へ..... 6  
 医学部新入生の皆さまへ..... 8  
 看護学科新入生へ..... 8  
 患者様の安心と学生の向上心を支える三重大学医学部を目指して..... 9  
 理事就任のご挨拶..... 11  
 退官のご挨拶：三重で日本血栓止血学会を開催します。..... 12  
 退職のご挨拶..... 13  
 退任のご挨拶..... 17  
 三重大学には長い間お世話になりました：定年退職にあたり自己評価してみました..... 18  
 転勤のご挨拶『産婦人科手術クラブ』..... 20  
 退任のご挨拶..... 21  
 教授就任のご挨拶“manifests”..... 23  
 医学系研究科看護学専攻長への就任にあたって..... 26

トピックス

大学院医学系研究科生命医科学専攻（博士課程）、  
 医学専攻（修士課程）の入学試験実施状況について..... 27  
 大学院医学系研究科看護学専攻の修了・入学状況について..... 28  
 平成31年度医学部医学科入学者選抜結果について..... 29  
 平成31年度医学部看護学科入学者選抜結果について..... 30  
 平成30年度解剖体感謝式報告..... 30  
 平成30年度白衣授与式について..... 31  
 平成30年度（第24回）医学部公開講座の開催..... 31  
 三重大学病院主催市民公開講座『がん最先端医療』を開催..... 32  
 平成30年度教育貢献賞を受賞して..... 33  
 平成30年度教育貢献賞を受賞して..... 34  
 はまゆう祭実行委員長より 医学部の皆さんに一番読んでいただきたい文章..... 35  
 三重大学医学賞、病院賞、病院教育賞について..... 37  
 平成30年三重大学医学賞を受賞して..... 37  
 三重大学病院賞を受賞して..... 38  
 三重大学病院教育賞を受賞して..... 39  
 医学部長表彰を受けて  
 医学部女子バレーボール部・医学部卓球部女子・医学部陸上競技部  
 医学部空手道部・医学部剣道部女子..... 40

学会だより

2018年（第37回）日本癌学会奨励賞を受賞して..... 44  
 International Confederation of Plastic Surgery Societies Award of Excellenceを受賞して..... 45  
 「日本病院薬剤師会東海ブロック・  
 日本薬学会東海支部合同学術大会2018ベストプレゼンテーション賞」を受賞して..... 46  
 第50回国際小児がん学会を開催して..... 47  
 西日本医学生学術フォーラムを開催して..... 48  
 「第34回NPO法人日本脳神経血管内治療学会学術総会poster賞金賞」を受賞して..... 49  
 「第34回NPO法人日本脳神経血管内治療学会学術総会JNET論文賞金賞」を受賞して..... 50  
 第37回The Mt. Fuji Workshop on CVD HS賞を受賞して..... 51  
 「第15回日本乳癌学会中部地方会」を開催して..... 52  
 「第55回小児外科学会優秀演題発表賞」を受賞して..... 53  
 JSS Young Research Awardを受賞して..... 53  
 第26回三重県胎児・新生児研究会を主催して..... 54  
 第21回日本救急医学会中部地方会 総会・学術集会..... 55  
 第18回日本内分泌学会東海支部学術集会を開催して..... 56

学位記授与..... 57  
 編集後記..... 58

## 医学部新入生の皆さんへ

医学系研究科長・医学部長 片山直之



ご入学おめでとうございます。

昨年の夏、日本は豪雨、台風、地震に見舞われ、大きな被害を受けました。被災地の皆様にはお見舞いを

申し上げます。その様なときに、三重大学医学部では歴史的なことが起ったのです。三重大学医学部が40年ぶりに主管校として第70回西日本医科学学生総合体育大会(西医体)を運営致しました。まずは、第30回大会と同様に、切りのいい記念すべき第70回大会を主催できたという幸運に恵まれたことです。西医体は、西日本にある44大学の医学部生が参加する我が国では国体に次ぐ規模のスポーツイベントで、今回は関係者も含めると約2万人が参加しました。大会の準備も1年以上前から取り組み、学生達はよく頑張ってくれていました。運営委員会のメンバーの中心が4年生で、競技選手の軸も4年生でした。開催期間は8月上旬からお盆過ぎまででしたが、大変な猛暑で随分心配もしましたが、学生達の頑張りと、OB/OG、三重大学の関連病院、同窓会(三医会)からのご協力とご支援で大過なく終えることができました。次は、なんと三重大学医学部が総合優勝を果たしたのです。管理・運営力と競技力を併せ持った自慢の三重大学医学部です。昨年は6位、一昨年も優勝、その前の年は3位で、競技力は安定しています。今度は本業の方に話を移します。医学部の使命は、医師の育成です。全国には82の医学部あるいは医科大学があり、その内国立大学の医学部あるいは医科大学は42校です。医師の育成の最も

良い指標は医師国家試験の合格率です。この原稿の締め切りが今年度の医師国家試験の合格発表の前で、今年度の結果はまだですが、昨年と一昨年の医師国家試験の合格率の順位については、国立大学の中でそれぞれ6位と3位でした。これでお分かりのように医学部としての本業もかなりのものです。文武両道の三重大学医学部ですので、皆さんが大学生活を充実できる環境にあると言えます。

皆さんはこれまで受験勉強に打ち込んでこられたのですが、受験勉強では友人はライバルでもあったわけです。しかし、これからはお互いが仲間になります。医師国家試験の合格率に制限はありません。皆さんが仲間と一緒に、勉学に励めば、同級生全員が医師国家試験に合格できますので、是非とも医師国家試験合格率100%を目指してください。また、同級生は卒業後に医師として仕事をしていく上でもとても大切です。将来に異なった診療科の医師になっても、患者さんのことについて色々と気軽に相談できるのが同級生です。同級生に刎頸の友、朋友を作ることは勿論のこと、諸先輩や来年以降に入学してくる後輩たちとも多くの接点を持って、交流してください。

大学というところは、教育機関だけでなく、研究機関でもありますので、大学院生や教官などは研究者でもあります。研究者はそれぞれの分野で独創的な研究を行っていますので、社会から隔離されている「白い巨塔」には好奇心が強く、個人的でときに偏向的にもなる多様な人材が集まっています。これこそが大学医学部です。是非とも、多くの研究者と時間と空間を共にしながら、話をしてみてください。研究者は、あなた達が訪れる

のを待っています。

皆さん、このような素晴らしい三重大学医学部

での大学生生活をエンジョイしてください。

## 新入生へのメッセージ：看護学を学ぶあなたへ

看護学専攻長 林 智子

ご入学おめでとうございます。

新入生のみなさんは、入試の面接で「三重大学医学部看護学科を受験した動機」「入学してから学びたいこと」「将来どのような分野で活躍したいのか」を問われ、それぞれ篤い思いを語ってくれました。その内容を大切にしながら、さらに深く自分自身に問いかけてみましょう。

なぜ大学で看護学を学ぼうと思ったのか。

なぜ看護職を選んだのか。

看護学科に入学したあなたは、看護職としてのキャリアの第一歩を歩み始めたのです。看護職としてどのようなキャリアを発達させていきたいのか。そのことは、あなたがどんな人生を送りたいのかということに直結しています。看護職としてのキャリアはあなたの人生そのものになるかもしれませんが、人生の目標や意味、あるいは生きることの意味をも考えながら看護学生としての歩みを始めましょう。もしかしたらこれまでは、大学に入学すること自体が目標だったかもしれませんが、むしろこれからは目標という表現ではなく、夢・希望・願望といった方がいいのかもしれませんが。大学に入学した今は、もう少し遠い将来を見すえた実現可能なカタチに「目標」をイメージすることができるのではないのでしょうか。

みなさんがこれから学んでいく看護学というのは新しい学問分野です。医学や心理学、社会学などの学問分野の知識や理論を援用して発達している学際的な学問です。看護学を学ぶためには、これら他の学問分野の素養が必要となります。ま

た、看護の対象は人間であり、質の高い看護を行うためには深い人間理解が必要になります。「他者の痛みをわかる人間になるように」とか、「他者の立場に立ってものを考えられる人間になるように」といわれます。看護学の専門知識や技術を修得するとともに、人間としての感性を磨き、教養を身につけることが求められます。F.ナイチンゲールは『看護覚え書』の中で、「自分は決して感じたことのない他人の感情のただ中へ自己を投入する能力」を看護師に必要な能力であるとし、「もしあなたがこの能力を全然もっていないのであれば、あなたは看護から身を退いた方がよいだろう」と述べています。

さて、大学では何事にも「自己責任・自己管理」が求められます。学習への取り組みも主体的・能動的態度が必要です。「君たちが傍観者でいる限り成長も成功もないことを知っておくべきだ」という言葉を心に留めておきましょう。学習の当事者となって自らの考えを発表し、他者の考えを尊重して聴きましょう。多くの人との議論を通してさまざまな価値観に触れることができます。また、人が直接経験できることは限られていますが、書物を読むことで想像力が養われ、他者への慮りが生まれ、思考や情緒の広がりも得られます。そういう意味で大学は知の宝庫です。

学問は学ぶだけではなく、その発展へ貢献することも必要です。すなわち、看護研究に取り組み、新しい知見を見出すことで看護学の発展に寄与することです。三重大学には医学部看護学科の教育

課程に加えて、医学系研究科看護学専攻としての大学院博士課程（前期課程・後期課程）の教育課程もあります。大学教員や研究者も看護職としてのキャリア発達の1つに加え、大学院への進学も

考えてみてください。私たち教員は、看護職生涯発達のすべてのステージにおいてみなさんを応援しています。

## 新入生へのメッセージ「正しい知識をアップデートしよう」

教務委員長 島岡 要

新入生の皆さん入学おめでとうございます。皆さんには周りから尊敬され信頼される立派な医療者や立派な研究者に近い将来なってほしいと、いつも願っています。医療分野でも研究分野でも頼れるエキスパートが本当に必要なとき、この人なら信頼して任せられると評判の高い人物になってほしい。そのような目標に向かって大学生活を有意義におくるために、いつもお話している大切なこと<sup>(1)</sup>を、本年度もアップデートしてお話します。

### 正しい知識を身につけ、つねにアップデートする。

スウェーデンの医師ハンス・ロスリング先生の著書「FACTFULLNESS」<sup>(2)</sup>から借りてきた「世界の現状」に関する問題に答えてください。

問1：世界中の1歳児のなかで、なんらかの病気に対して予防接種を受けている子供はどのくらいいるでしょうか？

- A) 20%
- B) 50%
- C) 80%

問2：いくらかでも電気が使える人は、世界にどのくらいいるでしょうか？

- A) 20%
- B) 50%
- C) 80%

世界の現状に対して、多くの人が最も悲惨な状態を想像しているのではないのでしょうか。実際にロスリング先生が世界を講演して様々な国の有識者に同じ質問をすれば、大多数の人たちが20年前の世界の現状を今でもそうであると思いこんでいるのです。しかし大局で見れば世界は急速に良くなってきています。正しい知識を身につけ、その知識を日々アップデートして、不必要に悲観的になることなく、最も楽観的な視点を持ちましょう。

### 目的意識を磨く

「大学で何を学びたいのか、いかに学びたいのか、大学で身につけた知識、知恵、スキル、人脈をもとにいかに社会に貢献するのかについて考えてほしい」と毎年新入生の皆さんにはお伝えしています。この問いの答えをただ漠然と一人で考えていてもなかなか前には進めません。そんなときには本を読みましょう。ウェブ検索で安直な答えに飛びつくのではなく、何冊も本を読みましょう（新入生にオススメするなら「死すべき定め(アトゥール・ガワンデ)<sup>(3)</sup>」、「ホモ・デウス(ユヴァル・ノア・ハラリ)<sup>(4)</sup>」、「がん-4000年の歴史-(シッダールタ・ムカジー)<sup>(5)</sup>」の3冊です)。また同級生や、クラブの先輩だけでなく、もっと人生経験のある先生とも話をしましょう。知識は講義を受けるだけでも身につくかもしれませんが、知恵をつけるには経験が必要です。大学の先生は学術

的専門分野をもった知恵の宝庫であるエキスパートです。授業中でも授業が終わったあとでもいいので、毎週一度は質問をしましょう。先生との会話から新たな学びや、目的意識につながる重要なきっかけをつかめることが多いはずです。そして質問はあなただけでなく、クラスの他の学生や、さらには先生までも成長させるきっかけを作ります。

### 手段を行動しながら考えよう

新たなことに挑戦するときには、失敗するのではないかという不安と恐怖がつきものです。失敗して恥をかいたらどうしようと、誰もが恐怖を感じ、不安に苛まれます。実は米国でのある有名な調査によれば、人前で恥をかく恐怖は死の恐怖にまさることがわかっています<sup>(6)</sup>。挑戦しなければ、失敗するかもしれないという不安や失敗して恥をかく恐怖から一時的に逃れることができるかもしれません。しかし晩年に自分の人生を振り返り、挑戦しなかったことを人は後悔します。挑戦して失敗したことはいい思い出になりますが、挑戦しなかったことは永遠に後悔するでしょう。

挑戦して失敗することよりも、失敗する恐怖に負けて挑戦できないことが問題です。挑戦すればたとえ失敗しても、失敗の経験から学ぶことができます。失敗の経験とは負けではなく、単にある方法がうまくいかなかったことがわかる経験値の獲得です。しかし失敗を恐れて挑戦しなければ、経験値を獲得する機会は失われ、成長することなくいつまでも同じ恐怖や不安を抱え続けなければなりません。

挑戦するためにはまず簡単な計画を紙に書きましょう。不完全でもいいので、暫定的な(=とりあえずの)計画を立て、立ち止まらずに少しだけ行動しましょう。そうすれば、予想もしていなかった問題に遭遇するでしょう。そうすれば計画を少

しだけ修正し、また少しだけ前進しましょう。そしてまた次の予想外の問題に出逢えば、さらに計画を修正をして、もう一步前進しましょう。

この「暫定的計画」→「少し行動」→「問題との遭遇」→「計画修正」→「再び少し行動」という“愚直なサイクル<sup>(7)</sup>”を回せば、怯むことなく新しい世界へと前進することが可能です。行動しながら考えれば、予想外の問題だけでなく、ときには予想外のチャンスに出会うこともあります。このようなクリエイティブな出来事を創発(Emergence)といいます。創発はじっとしては起こりません。勇気をもって失敗する恐怖に打ち勝ち、行動したものにだけに舞い降りてくるのです。

### 知識のアップデートの訓練を

「人前で恥をかく恐怖は、死の恐怖をまさる」という統計は1977年のものです<sup>(6)</sup>。ですから、もちろんみなさんが自分でアップデートする必要があります。インターネット検索を駆使すれば、アップデートのヒントが見つかりますので、練習問題だと思ってぜひやってみてください。

### 参考文献：

- 1) 島岡 要「新入生へのメッセージ：推進力をつけましょう」 三重大学医学部News. No.181 2018. 4. 1. p4 - 5.
- 2) ハンス・ロスリング(著), オーラ・ロスリング(著), アンナ・ロスリング・ロンランド(著), 上杉 周作(翻訳), 関 美和(翻訳) 「FACTFULNESS (ファクトフルネス) 10の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣」 日経BP社 (2019/1/11) ISBN-10: 4822289605
- 3) アトゥール・ガワンデ(著), 原井 宏明(翻訳) 「死すべき定め — 死にゆく人に何ができ

- るか」みすず書房（2016／6／25）ISBN-10：4622079828
- 4）ユヴァル・ノア・ハラリ（著），柴田 裕之（翻訳）「ホモ・デウス 上：テクノロジーとサピエンスの未来」河出書房新社（2018／9／6）ISBN-10：4309227368
- 5）シッタールタ ムカジー（著），田中 文（翻訳）「がん－4000年の歴史－」早川書房（2016／

- 6／23）ISBN-10：4150504679
- 6）David Wallechinsky, Irving Wallace, and Amy Wallace. Ed. “The 14 Worst Human Fears (from London Sunday Time)” in The Book of Lists. p 469–470, 1977. Bantam Books
- 7）島岡 要（著）「行動しながら考えよう 研究者の問題解決術」羊土社（2017／3／27）ISBN-10：4758120781

## 大学院新入生の皆様へ

大学院委員会委員長 山崎 英俊

本学大学院医学系研究科修士課程並びに博士課程への御入学おめでとうございます。また、本学の大学院医学系研究科をお選びいただきありがとうございます。本年度は修士課程入学者8名（4月入学者6名、30年度10月入学者2名（国費留学生2名を含む）定員12名）、博士課程入学者53名（4月入学者35名、30年度10月入学者17名（国費留学生4名を含む）定員45名）です。博士課程は昨年度と比べて入学者が増加しましたが、修士課程は例年とほぼ同数となっています。

修士課程の方は、2年間（長期履修の方は最大4年）、博士過程の方は最長4年に渡る大学院医学系研究科での研究生活が始まります。修士課程の方の大部分は他学出身で、博士課程の方も、半数以上は他大学医学部出身で、全体の2割は医学部以外の出身者です。本学で実りある大学院生活をおくっていただき、2–4年後は無事に学位を取得し、卒業して頂きたいと思います。

大学院には基礎医学系講座、臨床医学系講座、産学官連携講座、連携大学院、多数の寄附講座に加え、多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成基盤推進プラン、基礎研究医養成活性化プログラムが開設

されています。また、本研究科は、文科省の国費留学生優先配置特別プログラムに採択され、最終年度の博士、修士課程の入学者が多数おります。本学のグローバル化の目標もあり、講義資料は英語と日本語併記、講義受講者の多くが留学生の場合は英語による講義も行なっています。日本人学生、留学生の両者にとってより理解が深まるように考えて進めておりますので、どうかご理解いただきたいと思います。また、多くの大学院生は臨床医学系を専攻しており、基礎医学系専攻者は少ない状況です。基礎医学の教員になられる医師は非常に少なく絶滅危惧種と揶揄されている状況です。是非、基礎医学にも興味を持っていただきたいと思います。

大学院生活での就学及び経済的サポートについて説明します。現在、大学院博士課程及び修士課程の昼夜開講制対象者（社会人学生）に対してeラーニングを用いた修学サポートを行なっています。経済面では、修学補助として、TA, RA制度を取り入れています。フルタイム就業の社会人学生は本事業の対象外となります。学会にて筆頭演者として参加・発表された場合は、学会参加費の一部の援助もしています。最近、奨学金の返済

の滞納の報道や奨学金を一部給付制度にする政府案が出ておりますが、現在、修士・博士課程ともに日本学生支援機構奨学金返還免除制度があります。本年度は、医学系研究科の修士課程枠1が返還免除対象となりました。ホームページ等で業績評価基準が示されておりますが、修士・博士課程共に優秀な学業成績で、優れた学会発表や英語論文発表（筆頭著者に限る）をされた方が高い評価を受けます。2年或は4年間貸与した奨学金が大学院の実績により一括で返済免除になるのは非常に魅力的です。加えて、修士・博士課程修了者の学業優秀学生に対して学長表彰、博士課程修了者には、三医会奨励賞も準備しています。博士論文がimpact factorの高い英文雑誌に受理されますと大学院博士課程の早期修了も可能です。是非、目指してください。

大学院は、学部と異なり、講義主体から演習・研究主体に変わります。研究手技や方法の取得も重要ですが、自らが考え、なによりも研究を楽しむことが重要です。実験で仮説を立て、それを検証することがあります。予想通りにいなくても、また意味のないと思われる結果を得た場合でも、大きな発見が生まれることがあります。先入観を持たず、自由な目で物事を考えてみてください。

大学院は、研究に没頭できる大切な期間です。医学科出身者は本学の新医学専攻コースや学部での研究室研修を除いて研究に触れる機会が乏しいと思います。最初は、思うように実験が進まず、悶々とし、研究への興味を失うかもしれません。山にもいろいろな高さや登る道があるように、研究にもいろいろな研究テーマやアプローチがあります。それぞれが目指すべき山に登る過程や時間、また高さも異なります。一喜一憂せず、自分にしか出来ない研究を目指して頑張りたいと思います。本学には、多岐に渡る分野で活躍されている先生が多数おられます。困ったときや疑問に思った時は、是非、積極的に様々な専門をお

持ちの先生方を訪ねてください。

大学院では、研究のいろはを学ぶ事はもちろんの事、自分に向き合い、多くのものを吸収し、新たな自分を形成する場です。学部（国家試験）は、覚えることが多く、標準的な知識基盤を身につける場所です。大学院は皆さんがお持ちの基盤の上に、まだわかっていない未来の医療や医学を追求し、新たな何かを生み出すところです。当然、教科書に書いてないことも、書いてある事と違う事も有ります。常識にとらわれずに、なぜ？どうして？を大切に、是非、真実を追究して欲しいと思います。最近、分子生物学や新しい研究技術の発達でいろいろな事が分かってきました。昔はこれらの技術がなかったので見つけた現象をあれやこれやと考えたものです。現在の研究は、既に判っている現象を最近の技術や手法を用いて、refineしたことも多々有ります。是非、常識にとらわれずに、三重大初のノーベル賞につながる研究を目指してください。

医学系研究科では、様々な講演会を日々行っています。これらの会に積極的に参加し、新たな知識を会得し、学生間或いは様々な専門性を持つ教官と議論を交わし、人間関係を広めてください。海外の一流研究者とのインターネットを用いた英語での講演会も定期開催しております。人的ネットワークの形成と有効利用をお勧めします。

三重大学医学系研究科には、旧帝大に劣らない研究環境（図書館も充実しています）と共通機器が多数整備されております。皆さんの研究にこれらの環境や機器を生かし、世界に誇れる研究成果を目指して頂きたいと思います。

最後に、本医学系研究科には様々な国、大学、専攻の方が集まっています。国費留学生優先配置特別プログラムに採択され、多数の留学生がいます。本研究科では工学或は生物資源学研究科との連携も推進しています。研究の成功には出身校や出身学部はあまり関係ありません。多様性や皆様

のこれまでの経験を本学での研究に活かして頂きたいと思います。新しいものを取り入れ、新たな自分を創り、新たな発見、研究の喜びを感じてください。縁あって三重大学に集まった皆様の大学

院生活が実り多いもの、幸多いことを切望します。大学院時代を有意義に過ごし、人生の織物の1部分として刻んでいただければ嬉しく思います。

## 医学部新入生の皆さまへ

三重大学医学部医学科自治会長 医学部医学科6年 水谷 凜一郎

新入生の皆さん、ご入学誠にありがとうございます。今皆さんは色々な思いを胸に新しいスタート位置に立っていることでしょう。医師として多くの人を救いたい、研究者になり医学に貢献したい、生まれ育った場所で地域医療に貢献したい、発展途上国で国際協力をしたい、と誰もが進路について考えながらこれからの大学生活に期待と夢で胸を膨らませていることだと思われます。

医学部での授業や実習はほとんど全てが今まで学んだことがない内容になっています。つまり未知の知識や技能を獲得することが多いです。受動的な態度で授業に臨むのではなく「自ら考え、自ら学ぶ」ことを実践し、自学自習を行う習慣をつけることが大切になってきます。そのため、すぐに理解できない内容であっても先ず自分で考える。そして、考えた内容を同級生と「協力」してお互

いに足りないところを補いながら学んでいくことでより理解を深めていけると思います。

また、大学ではこれまでの環境と異なり、自主的に行動できる活動の幅、時間が増えます。学業はもちろん、部活動やサークル、アルバイト、ボランティアといった課外活動を通して学べる可能性は無限大です。そこで得た経験や仲間は一生の財産になると思います。大学生活六年間は長いようで、意外とあっという間に過ぎてきます。なので、大学に入学した今、興味があるもの、やりたいと思っているもの、全て妥協せずにやって欲しいと思います。

それでは、皆さん、大学生活がやりたいことを精一杯やり、高い志を維持し最高の学生生活を送れるよう頑張ってください。

## 看護学科新入生へ

医学部看護学科自治会 牧戸 勇磨

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。受験勉強も終わり、これからの大学生活への期待と不安に胸を膨らませているのではないのでしょうか。

大学生活はとても自由であると思います。

看護師・保健師・助産師になるために一直線に突き進んで勉強することもできますし、海外留学をしたり、課外活動・ボランティア活動に参加して様々な経験を積んだりすることもできます。そして授業や部活・サークル・アルバイトなど数多



くの出会いがあり、様々なことを吸収することができるとても大切な時間です。

その大切な大学生活という時間を充実させる方法は人それぞれであります、充実したものにしていくために「チャンス」を大事にしてほしいと思います。

チャンスとの出会いは自分から動いて見つけ出したり、様々な出会いの中で偶然見つかったりといういろいろですが、大学は多くのチャンスに溢れている場所です。そのチャンスに出会ったら、

チャンスを活かせるように自分から動いてほしいです。

自分から動くことは多少勇気のいることでもあります、その勇気に見合うだけの、あるいはそれ以上の価値を得ることができると思います。

私たち看護学科自治会も大学生活をより充実させることができるような「チャンス」を少しでも作れたらと思っています。

失敗を恐れずに、何事にも積極的に取り組んで、有意義な大学生活をおくってください。

## 患者様の安心と学生の向上心を支える三重大学医学部を目指して

医学部個別化がん免疫治療学講座 溝 口 明



2019年3月末日をもって三重大学医学部解剖学第一講座 教授を退職し、片山直之先生（医学部長）、伊藤正明先生（附属病院長）、駒田美弘先生（学長）、珠玖洋先生（個別化がん免疫治療講座学特定教授）のご厚情を賜り、あと3年、個別化がん免疫治療学講座の教授を拝命いたしました。私は、神戸大学医学部卒で、その後、京都大学の早石修先生の薫陶を受けました生化学研究者であったにもかかわらず、三重大学医学部の先生方や、第一解剖学講座の皆様には暖かく受け入れていただき、特に早石研の先輩であられる宇城啓至先生や系統解剖学・脳解剖学の教育経験豊富な栢原哲郎先生、および秘書の小林いつ子さんには、教育・研究面で、いろいろ助けていただきました。そのおかげで、約18年間、何とか三重大学医学部の解剖学教育の重責を果たすことが出来ました。私自身は、顕微鏡組織学で、学生諸君と、標本・プレパラートを見ながら、細胞や組織

や病気の話をするのが好きで、三重大学のまじめな学生さんと、貴重な楽しい時間を過ごせたことは、私の大きな喜びです。退任の機会に、これまでの感謝をこめて、三重大学医学部の発展を祈念して、将来展望を少し述べさせていただきます。

現在、最も心配な世間の動向は、旧国立大学の大胆な統廃合機運です。一説によりますと、少子化等の影響もあり、大学の大規模な集約化が計画されているようです。東海では、岐阜大学が名古屋大学と既に統合され、静岡大学も浜松医科大学と統合されることが公式に発表されております。この明治時代以来、国が力を入れてきた教育・研究分野において、これほど大規模な研究多様性の縮小が実施されるのは初めてのことです。三重県にとっても、津市にとっても、三重大学は、社会を良くしたい、良く生きたいと願う若者の集う場所として必須不可欠であり、三重県内の患者様にとっては、三重大学附属病院は、重い病気になっても助けてもらえる希望の砦として、信頼されております。即ち、地方大学は、地方創生、活性化の中心だと考えられます。それに対して、昨今の

政府の働きかけは、財政上や少子化の理由によるものにせよ、地方大学を切り捨てる方向に変わりではなく、ここは、三重県や行政の関係者にも働きかけて、三重大学必須不可欠運動を展開していただきたいと願っています。また、国の方針としても、地方大学における研究の多様性を無駄と排除し、都市部の大きな大学のみで集約的に研究すればよい、海外の一流研究に追随すればよいという姿勢では、独創性軽視の研究姿勢に繋がり、我が国の独創的研究開発力・イノベーション力の低下が心配されます。実際に最近では、東大、京大でさえも、世界の大学評価順位で50位前後に後退しており、日本の全国のトップ高校生20人程度は、日本の大学を選ばず、ハーバード、スタンフォード、ケンブリッジ、オックスフォードなど、欧米の大学に入学する傾向があり、理研や東大といった日本でトップの研究施設の教授も、日本の研究環境に幻滅して、欧米の大学に移転する傾向が顕在化しています。また、これまで、日本では、医師が基礎研究をやっても良いという世界的には例外的に恵まれた風土があり、三重大学医学部でも、「科学精神をもった医師の育成」を教育目標に掲げてこられ、これは素晴らしいことだと思っておりましたが、この精神を伝授する場として重要な役割を果たしてきた地方大学の存続が、今、危機となっており、三重大学の関係者の皆様に心から、その存続にご支援をお願いする次第です。

このような大学統廃合運動の中で、三重大学医学部の存続の切り札となるのは、やはり学校と病院の原点として、患者様の安心と学生・若手医師・研究者の向上心を守ることであると確信します。ただし、大学病院で医療を行なう以上、患者様には、日本でトップレベルの良い医療を提供させていただき責任があり、そのために、多くの職員が知恵を出し合って、信頼関係に満ちた強い協力組織を形成してゆく必要を感じます。例えば、最近、がんの診断治療では、患者様の血液約7cc

から、その中に含まれる全ての遺伝子の情報を解析（全ゲノム解析）することで、その患者様の体内にどのようながんが存在するのか、直径1センチ程度の早期がんでも、ほぼ90%の精度で判断できるようになっています。このリキッド・バイオプシと呼ばれる方法は、患者様の体内のがん細胞が、特有のマイクロRNAと呼ばれる物質を放出したり、一部の壊れたがん細胞がDNAと呼ばれる物質を放出したり、それらが血液中に流入したりして、がんの痕跡となり、それらを詳細に分析する最新技術によって、もとのがんの有無や種類、転移のしやすさや、抗がん剤や放射線療法の効果予想さえも、できるようになりつつあります。実際に、がんの外科治療においても、がんを手術で摘出し、従来は完全ながんが除去できたか確認するすべはなかったのですが、リキッド・バイオプシを用いて手術後5日目の血液検査で、患者様の血液中に上記のがん細胞由来のマイクロRNAやDNAが検出されなければ、がんの取り残しのないことを確認できますので、まさに革新的な進歩が実現されています。このような最新の技術で患者様への最善の診断治療を目指すことは重要ですが、一方で、この最新ゲノム解析には、数億円の初期投資と毎年1億円程度の消耗品費・人件費が必要となり、三重大学医学部では、財政的な困難さから、まだ、本格導入の決断は出来ていないのが現状です。ここは、腫瘍内科がご専門の片山直之先生や、循環器ご専門の伊藤正明先生、小児白血病撲滅をライフワークにしておられる駒田美弘先生、新たに研究担当理事になられた緒方正人先生らが、中心となって、基礎医学と臨床医学、全職員一丸となって、なんとか資金をやりくりして、一点突破していただきたいと祈念しております。丁度、4月11日には、稲垣昌樹先生（分子生理学講座教授）のご努力でAMEDの末松誠理事長が三重大学を訪問して下さることになり、政府が目指す次世代医療の研究開発体制についてご講演し

ていただけるので、これを機に全ゲノム医療の勉強を開始できればと考えております。

患者様と並んで、もう一つの三重大学医学部の大切な存在は、学生諸君です。2019年の医師国家試験では、成績が芳しくなく、残念でした。この原因に関しては、教務委員会などの分析を待ちたいと思いますが、これらの学生のこの一年の勉学や精神的な相談の窓口として、多くの職員の助けが求められていると感じます。また、このような悩みの多い日々を過ごした学生の中から、将来、患者様の悩みを親身に受容できる人材が生まれる可能性も高く、ここは、おおらかに見守ることも良いかと思えます。

一般的に、三重大学医学部の学生は、純朴な人柄の子が多く、授業や実習をしていても、まっすぐな質問をしてくる学生が多く、その正直さ、真

摯さに、教員として心を打たれることがしばしばあります。また、多くのクラブ活動でも、先輩が後輩を丁寧にて育て、後輩は先輩を家族のように慕って尊敬している、という夢のような人間関係を形成していることもあり、これほどの信頼関係を学生時代に体験された医学部学生諸君が、患者様とも、このレベルの信頼関係を構築できれば、現在より信頼関係の質の高い医療が実現できるものと確信する次第です。

以上、三重大学医学部は、現在、存亡をかけた大学統廃合運動という大変革点に差し掛かっていますが、患者様の安心と学生諸君の向上心を中心にまとめれば、立派な地方大学として、我が国の成功例の第一号になれると確信いたします。在職18年間、多くの先生方、学生諸君に教えて頂き、誠にありがとうございました。

## 理 事 就 任 の ご 挨拶

医学系研究科・機能プロテオミクス（生化学） 緒 方 正 人

本年4月の2019年度より三重大学の理事（研究担当）を拝命することとなりました。教育や研究など、医学系研究科を完全に離れるわけではありませんが、本籍地が大学本部に変わります。これを機に、一言皆さまにご挨拶させて頂きたいと思えます。

私は2002年に三重大学に赴任しましたので、今年で18年目に入ります。この間、教育や研究はもとより、大学院や医学系研究科の運営等でも多くの方々に助けて頂きました。なんとかここまでやってこれたのは、ひとえに医学系研究科教職員の皆さまのお蔭と、お礼の申し上げようもありません。

日本の大学の研究力低下がよく言われます。これは、論文の国際比較のデータ等でも裏付けられ

ています。独法化後の定員削減や、教育・研究以外の業務負担の増大がボディーブローのように効いていると思えます。しかし、三重大学医学系研究科は捨てたものではありません。例えば、私がすぐ思いつくだけでも、学外に多くの教授が巣立っています。放射線、産婦人科、整形、皮膚科、解剖、生化、病理、微生物、医動物、衛生、法医、遺伝子・免疫細胞治療、遺伝子病態制御などの講座ですが、もし漏れているものがあれば、どうぞご容赦下さい。これは、医学系研究科に活力がある証拠だと思います。また、三重大だけで教授になれるのは各講座一人までですから、共に苦勞した仲間が学外に活躍の場を広げるのは、素直にうれしいことです。生化学講座で私が一緒に過ごした仲間からも、学外の教授が2名誕生しました。

もっとも私の功績ではなく、各自が努力した結果ですが。今後も、三重大学医学系研究科が学外に教授を輩出する活力を持ち続けることを祈ります。

最後になりましたが、研究担当理事を拝命する立場で一言申し上げます。大学に研究は欠かせません。三重大学は、国立大学中「重点支援1」という類型に分類されています。この類型は、国立大学中55大学と最多で、地域貢献が重視されます。しかし、この類型といえども「世界ないし全国的な教育研究を推進する」ことが求められています。文科省が我々の研究を評価する際の共通指標がどのようなかはまだ決まっていますが、旧帝大などの研究大学の例では、引用のtop 10%論文の数などが用いられています。つまり、単に論文の数だけではなく、所属する研究領域で存在感の

ある（よく引用される）論文を出すことが重要と考えられます。我々としては、魅力的な研究領域で、存在感のある研究業績を出すべく研究に努め、また、研究力の高い人材を内外に求め育てる不断の努力が重要です。これはなにも目新しいことではなく、本学医学系研究科のDNAに書き込まれた我々の伝統ともいべきものです。しかし、自戒の念を込めていうなら、忙しさにかまけて少しおろそかになっていた部分が無いわけでもないと思います。

三重大学医学系研究科の今後の一層の発展を祈るとともに、引き続き変わらぬご助力を賜うことをお願いして、理事就任のご挨拶とさせていただきます。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。

## 退官のご挨拶：三重で日本血栓止血学会を開催します。

医学系研究科 検査医学 和田 英 夫



本年3月末をもって三重大学を退職することになりました。三重大学の皆さまには、在学ならびに在職中大変お世話になりましたことを、御礼申し上げます。私は1972年に三重大学に入学しましたが、学生運動や国会審議の遅れの影響で、入学できたのは5月でした。入学の躰きからか、学生時代はバドミントンばかりして、勉強の時間が少なかったことを今となっては悔やんでいます。当時は卒業すぐに大学院に入れ、血栓止血学に興味を持ったことから第二内科の大学院に進み、1982年4月からは第二内科の助手にさせていただきました。46年11か月間に渡り三重大学に在籍し、23か月間のNIH留学と2か月間のミシガン

大学出張以外は、38年10か月間三重で血栓止血の診療・研究をさせていただきました。研究の思い出は、国際血栓止血学会の播種性血管内凝固（DIC）部会のchairmanを務め、Taylor F先生（オクラホマ医学研究センター）やToh CH先生（王立リバプール大）らとともに、播種性血管内凝固（DIC）の国際的な診断基準やガイドラインの作製を主導させていただいたことや、日本血栓止血学会の学術標準化委員長を務め、丸藤先生（北大）や朝倉先生（金大）らと国内版DIC診断基準やガイドラインの作製を主導させていただいたことです。国内のガイドライン作製では、学閥等大変な障害があり苦労しましたが、国際的基準やガイドライン作製には言葉の壁はあるものの、調整作業は比較的スムーズにいったことを不思議に思っています。学内では、内田病院長の御許可

のもと血栓止血診療センターを開設し、学内で診療科横断型の血栓止血診療・研究を行ったことも、懐かしい思い出です。今年の6月には、三重県総合文化センターで第41回日本血栓止血学会を開催させていただき、三重の魅力や学問レベルの高さを内外にアピールする予定です(図)。御興味のある方は御参加いただければ幸いです。

4月からは新保病院長や片山医学部長のお勧めにより、県総合医療センターで働かせていただきます。最前線の大きな病院で、血液/血栓止血/検査に関する診療業務をさせていただくことになり、身の引き締まる思いです。夕方からは、分子病態学講座島岡教授の御厚意により、血栓止血学の研究も継続させていただく予定です。三重大学には約47年間お世話になりましたが、この間非常に多くの方に助けていただき、何とか退職の日を迎えることができました。御礼を申し上げますとともに、三重大学、三重大学医学部ならびに医学部附属病院の益々の発展を祈念しております。ま

た、今後も相変わらずの御指導・御支援を賜ることを切に希望しています。



図. 第41回日本血栓止血学会

## 退職のご挨拶



私は、昭和54(1979)年に三重大学医学部を卒業後、三重大学第一外科に入局し、その後も三重大学を中心に消化器外科、特に肝胆膵外科並びに肝移植の医療と研究に携わってきました。この間、水本龍二教授、川原田嘉文教授、上本伸二教授に師事し研鑽を積み、平成19(2007)年12月1日に現在の肝胆膵・移植外科学(当時は肝胆膵・乳腺外科)の教授に就任させて頂き、平成31(2019)年3月31日をもって定年退職しました。山田赤十字病院(現

肝胆膵・移植外科学 教授 伊佐地 秀 司

在の伊勢赤十字病院)への3回の赴任期間4年を除くと、36年間、本学に在籍したことになりますが、この間、公私にわたり皆様のご厚情に支えられ、大過なく診療・研究・教育を行うことができましたことを、心から有難く厚くお礼申し上げます。



今回の挨拶文を書くにあたり、教授就任時の挨拶文を検索したところ、平成19(2007)年12月6日に作成したファイルがみつかりましたので、その時の写真(11年で表情はかなり変わりました)と文章の一

部を引用させていただきます。

「私は昭和54年（1979）に三重大学医学部を卒業し、日本の肝胆膵外科をリードする水本先生に憧れて旧第一外科に入局しました。当時、日本外科学会では外科認定医制度が発足し、外科認定医の条件として心臓血管外科、呼吸器外科の研修が必須となったことから、第一外科病棟で6カ月間研修した後、胸部外科病棟で6カ月間研修しました。卒後初期に胸部外科で半年間の研修ができたことは、その後の臨床や研究における発想、人生観（特徴ある2つの教室を経験できた）に大きな影響を与えて、また現在行っている生体肝移植手技を修得する上でも役立っています。卒後2年間の外科初期研修を終えてから、三重大学大学院に入学し、水本先生のご指導により急性膵炎の病態生理の研究に従事しました。臨床の疑問を基礎的研究により解明することの「面白さ」（仮説が証明された時の喜びと、証明できない時の悔しさ）を、この時初めて教えて頂きました。大学院卒業後、水本先生のご高配もあり、昭和62（1987）年から米国カリフォルニア大学デイビス校外科研究員として、Frey教授の指導の下、急性膵炎における二次感染症の成立機序や膵移植の研究に従事しました。帰国後は、当時、第1外科では肝臓、胆道、膵臓の3つの研究班がありましたが、私は膵臓班のチーフとして急性膵炎、慢性膵炎、膵広範切除後の膵再生や膵癌の研究に従事しました。平成6年（1994）に川原田教授が就任され、それまで私は臨床より基礎的研究に重心を置いていたことから、県下で最も手術数の多い山田赤十字病院で経験を積むことを勧められました。病院の医局に泊まり込んだ生活（まさにレジデントとして）を2年間余り続け、様々な外科手術症例を経験することができました。ほぼ全ての外科領域の臨床経験を得られたことは、現在も私の貴重な財産となっており、このような機会を与えて頂いた川原田先生に感謝しております。平成8（1996）

年に大学に戻り、川原田先生から、膵臓のみならず、肝臓や胆道の臨床や研究も行うように勧められ、肝胆膵の手術や肝切除後の肝障害の研究に従事しました。平成13（2001）年に上本教授が京都大学から着任され、三重大学に生体肝移植医療を導入されました。生体肝移植には、それまで私が経験してきた消化器外科や肝胆膵外科領域の外科手技に加えて、血管外科領域の知識と手技の修得が必要であり、心臓血管外科での初期研修を思い出しながら生体肝移植医療の研鑽を積みました。昨年（2006）の10月には生体肝移植100例記念講演会を開催することができました。このような経験ができたのも、素晴らしい上司、大学の諸先生、そして意欲のある若い先生たちと巡り会えたからこそと思います。今後は、これまで教えて頂いたことを基礎とし、皆様のさらなるご協力を頂いて、魅力ある教室にしていきたいと考えております。」

教授就任時には、はつらつとした気持ちもありましたが、果たしてどの程度のことができるか不安でした。そこで、教授としての11年間を中心に肝・胆・膵臓外科の診療を振り返るとともに、将来についても言及させていただきます。

当科の肝臓外科では肝がんと肝移植が診療の中心でした。肝がんの8割は肝細胞癌ですが、肝細胞癌の治療には肝切除、ラジオ波焼灼療法、肝動脈塞栓術、分子標的薬、肝移植などがあり、これらの治療選択は腫瘍進展度と肝予備能を考慮して行われ、さらにこれらを組み合わせることで治療成績の向上が得られています。従って肝細胞癌の治療は消化器・肝臓内科や放射線科との連携が必要で、当院では当該3診療科間の密接な連携ができおり、満足できる治療成績をあげてきました。肝細胞癌は、機能的・解剖学的に肝切除が可能な場合は、肝切除が治療の第一選択となります。近年、メタボリック症候群の増加に伴い、非アルコール性脂肪肝（NAFLD）からの脂肪肝炎（NASH）を起因とした肝細胞癌の頻度が増加してきました。

このような症例では診断が遅れるために、腫瘍径が10cmを超す「いわゆる巨大肝細胞癌」で診断されることが多く、この場合は肝切除が第1選択となることが多く、肝臓外科医の役割はまだまだ大きいです。当院における肝移植は2002年3月～2018年12月までに159例に施行され、小児が28例、成人が131例（うち脳死肝移植3例）で、移植後の5年生存率は小児が89.4%、成人が65.3%でした。現在、東海地区4県で肝移植施行施設は当院と名古屋大学、藤田医科大学の3施設のみで、脳死肝移植ができるのは当院と名古屋大学の2施設のみです。今後、脳死ドナー数の増加が見込まれていますので、当院は脳死肝移植指定施設を維持し、さらなる肝移植医療の推進を進めるべきと考えます。

胆道外科の中心は胆道癌（胆嚢癌、肝外胆管癌、十二指腸乳頭部癌）、なかでも治療が最も困難な肝門部領域胆管癌です。水本教授は、肝門部領域胆管癌の外科治療に積極的に取り組み、肝門部領域胆管癌における尾状葉合併切除の重要性を世界で初めて明らかにされました。また、川原田教授は、肝機能の温存と腫瘍の根治度を損なわない新術式として肝臓の中央部を切除するTaj Mahal肝切除を開発されました。私は、これまでの当科の術式に上本教授が導入された生体肝移植医療の手技を取り入れた新術式として、肝門部領域胆管癌に対するTranshepatic hilar approach法（THA：肝切離先行肝門部処理、J Gastrointest Surg 2017）を開発し、これと術前治療を組み合わせた治療戦略をたてて治療成績の向上に努めてきました。なお、胆道癌に有効性が認められている抗がん剤は、現状では切除不能例に対するゲムシタビンとシスプラチン併用療法のみであり、切除後の補助化学療法に有効性が認められている抗がん剤は本邦ではまだありません。当科では肝門部領域胆管癌を解剖学的な切除可能性から、切除可能（R：resectable）、切除可能境界

（BR：borderline resectable）、局所進行切除不能（UR-LA：unresectable locally advanced）に分類し、BRとUR-LA症例には術前に抗がん剤治療や化学放射線療法を行い、腫瘍縮小効果例に対してTHA法による肝切除を行っており、今後さらに症例数の蓄積と新規抗がん剤の併用により成績向上につなげる必要があります。

膵臓外科の中心は膵臓がん、なかでも浸潤性膵管癌（膵癌）です。日本膵臓学会では膵癌取扱い規約を作成していますが、当科では水本教授が規約第4版（1993年）の規約委員長を務められ、第5版（2002年）の委員長は川原田教授が担当され、第7版（2016年）の委員長は私が務めさせて頂きました。このように当科は日本の膵癌診療を支えてきたといっても過言ではありません。さらに、膵癌の治療方針を決定するうえで切除可能性分類（R, BR, UR）がありますが、この国際基準がなかったことから、私が中心となり膵癌切除可能性分類の定義と基準に関する国際コンセンサス2017を発刊することができました（Pancreatology 2018）。当院では、膵癌の治療成績向上を目指して、当時はまだほとんどの施設で術前治療を導入していない状況で2005年2月から術前化学放射線療法を導入し、2018年12月までに382例に施行してきました。世界的にみても、単独施設で350例を超える術前化学放射線療法が施行されている施設はほとんどなく、今後もさらに有効な抗がん剤との併用により、極めて予後不良な膵癌の治療成績の向上が望まれます。

つぎに、大学病院の使命として関連病院の維持・充実があげられますが、これにはいかにして外科医を増やし、教育していくかが課題となっています。この点に関して教授就任の挨拶文を再度引用（一部、訂正）します。

「医学部ならびに附属病院に勤務する医師の責務は、診療・研究・教育の三本柱をバランス良く有機的に構築し、発展させることだと考えま

す。まず医師として、臨床能力の習得、特に外科医では外科手技の鍛練が必須であります。鍛練について具体的な期間を示したものとして、宮本武蔵は五輪書の中で「千日（約3年）の稽古を鍛とし、万日（約30年）の稽古を練とする」と述べています。日本外科学会専門医制度では、卒後初期研修2年後、最低3年間の外科研修を外科専門医の条件としており、武蔵の定義した「鍛」の期間に相当します。この外科専門医取得後（鍛の期間終了後）、「練」の期間に入り、消化器外科や心臓・血管外科などの専門診療科の専門医を取得することになります。平成16（2004）年の卒後初期研修制度の導入以来、三重大学では外科後期研修医（いわゆる入局者）が減少しています。将来外科医を目指す初期研修医、医学生をいかに増やすかが、三重県の外科医療を維持、発展させる上での最重要課題となっています。三重大学医学部では、卒業生の多くが卒後初期研修を医学附属病院以外の病院で行っているのが現状ですが、その約半数は県内の関連病院を選択しています。そこで、当科及び関連病院のご協力により、県内の初期研修医および医学部5、6年生を対象とした「第1回三重県外科後期研修説明会と親睦会」を本年（2007）12月8日に開催することに致しました。今後このような会を定期的（年2回程度）に開催し、さらに胸部外科や消化管外科・小児外科の参加もお願いして、県内の外科後期研修医を増やし、これにより大学病院への外科入局者を増加させたいと考えています。」

教授就任当時は、果たして外科医が今後、増えてくるかどうか大変心配でした。平成19（2007）年12月に始まった「三重県外科後期研修説明会と親睦会」ですが、翌年からは「三重県外科ポストグラデュエートコース2008」と名前を変えました。内容も、第1部：Case scenario（研修医を対象として前向き症例検討会）、第2部：特別講演、第3部：外科研修説明会・懇親会という3部

構成としました。この三重県外科ポストグラデュエートコースは、当初は学生・研修医も対象にしていたのですが、参加者が少ないので、外科専門研修医（いわゆる入局者）を対象とした会になり、昨年まで続けることができました。来年もすでに開催日が決まりました。なお、当科は三重県下に16の関連病院を持ち、外科医の育成と適切な医師配置を行っています。16施設のうち初期臨床研修の基幹病院は8施設ですが、ほとんどの場合、外科専攻医は初期研修を行った施設で引き続き外科専門医研修（教授就任以降の入局者は32名）を行い、外科専門医を取得後に大学院に入学（これまでに20名）し、当科に戻り肝胆膵外科診療や基礎的研究（主に肝虚血再灌流障害）に従事しながら博士号を取得して、その後は関連病院（地域医療施設を含む、海外留学希望者は留学）に赴任してもらうことで、関連病院の勤務医配置を行ってきました。今後も、これまでのように関連病院との人事交流を維持し、新しい外科専門医制度のもとに地域医療への貢献を含めた県内の外科診療の発展を支えることが望まれます。

この4月からは、永井病院、武内病院、高木病院のご厚意により、三重大学医学部附属病院に寄附講座（臨床研修・キャリア支援部・三重大学ブランチャセンター・外科専門医育成支援寄附研究部門）を開設して頂きました。近年の医学部定員増により医師総数は増加しているものの、外科専門医を目指す若手医師は減少し、厚労省の平成28（2016）年度の集計によると、平成6（2004）年度と比較し医師数が減少しているのは、産婦人科医と外科医のみです。さらに、外科医の年齢層に着目しますと、39歳以下の若手外科医の割合は年々減少傾向にあります。すなわち、次世代の担い手となる若手外科医師数が少ないという危機的な状況にあります。三重県においても状況は同じです。この状況を改善するためには、当院の外科診療科（肝胆膵・移植外科、消化管・小児外科、



心臓血管外科、呼吸器外科、乳腺外科)の連携をさらに強めて、関連病院の外科医療を効率的に支えることができる外科専門医プログラム等の充実を計る必要があり、その支援を行います。また、

現在の副病院長(診療担当)も務めさせて頂きますので、外科専門医育成支援とともに、これまで以上に病院業務にも尽力しますので、今後ともよろしく願い申し上げます。

## 退任のご挨拶

腎泌尿器外科 教授 杉村 芳樹



平成31年3月定年により退職となりました。在任期間は17年6か月でしたが、三重大学医学部および附属病院の皆さまには、公私ともにご支援をいただき大変お世話になりました。心か

ら御礼申し上げます。

私は、昭和53年三重大学医学部医学科卒業後、東京女子医大腎臓病総合医療センターにて1年間の研修を経て、三重大学大学院医学研究科泌尿器科学(故多田 茂教授)に入学しました。大学院卒業と同時に米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校(UCSF)解剖学教室に留学し、昭和62年に泌尿器科講座の講師となりました。平成6年から川村壽一教授のご高配にて、愛知県がんセンター泌尿器科に初代部長として赴任し、泌尿器科部の立ち上げに貢献しました。そして、平成13年10月1日に三重大学医学部泌尿器科学教室の第4代目の教授に就任しました。

在任中の17年間を振り返ってみました。まず、大学の組織改革(独立法人化、泌尿器科から腎泌尿器外科に改名)、教育改革(チュートリアル教育の導入)、研修医制度改革(初期研修の義務化)、専門医制度改革、教員の定年延長などの改革が続きました。さらに、麻酔医不足、婦人科や小児科の地域医療の崩壊、医療事故・訴訟など医療安全

への意識の高まりなど、厳しい医療環境となりました。一方、ハード面での再開発が進み、臨床研究棟がリニューアルされ、大学附属病院も広々とした素晴らしい新病院に生まれ変わりました。

泌尿器科の臨床においては、泌尿器腫瘍に対する腹腔鏡手術の普及・進展が目覚ましく、現在ではほとんどの腎・副腎腫瘍手術で施行されています。とくにロボット支援腹腔鏡手術(ダビンチ手術)が、平成26年に三重県内で初めて導入されました。平成27年2月に第1例目のロボット支援腹腔鏡前立腺全摘を施行しましたが、手術部ダビンチチームの絶大なるご協力を得て無事終了することができました。以後、平成31年3月までに前立腺癌と腎癌患者約300人のダビンチ手術が安全に施行され、全例良好な結果を得ております。ダビンチ導入により、泌尿器科の手術件数は約60%増加しました。また、学部学生の臨床実習において、ロボット手術に多くの学生が興味を示してくれるなど、多方面へのダビンチ効果がありました。

次に、研究・学術面においては、私のライフワークである「前立腺の増殖機構」について、歴代の大学院生とともに地道な研究をしてきました。2012年には米国泌尿器基礎研究学会(SBUR)の2nd International scalarに、2014年には第42回高松宮癌研究基金国際シンポジウムの組織委員に選出されました。また、泌尿器科と腫瘍病理学教室が4年毎に共同開催する「伊勢志摩前立腺生

物学シンポジウム」を2002年より計5回開催することができました。とくに、第2回のシンポジウムでは恩師の米国UCSFのクーニャ教授を招聘し、カナダと米国の前立腺基礎研究者が集い、心に残る国際的なシンポジウムとなりました。さらに、2016年に四日市にて開催された第66回日本泌尿器科学会中部総会を始め、第26回日本腎泌尿器疾患予防医学研究会、第20回日本泌尿器分子細胞研究会、第2回日本泌尿器癌局所療法研究会を主催させていただきました。このような研究成果が得られたのも、歴代の大学院生に限られた期間内に、粘り強く真摯に研究に取り組んだ成果です。しばし臨床から離れ大学院で過ごした時間は、大学院生一人一人の人間としての幅を広げ、培われた科学的思考は、日々の臨床に必ず役立つものと思います。医学博士の称号を持つ腎泌尿器外科医（Surgeon scientist）としての今後の活躍に、心からエールを送りたいと思います。

最後に管理・運営面ですが、附属病院治験管理センターのセンター長（2002年）と附属病院臨床研究倫理委員会委員長（2012年より2018年）をさせていただきました。臨床研究審査委員の諸先生には、長時間にわたる熱心な審議をしていただき、

本当にお世話になりました。また、大学事務と臨床研究開発センターのスタッフの方々には、研究倫理指針が毎年のように改定されることもあり、その対応や書類整理など莫大な事務作業をしていただき、本当にご協力ありがとうございました。

さて、急速な高齢化が進む我が国においては、腎泌尿器外科のニーズはますます増加します。次世代の三重大学腎泌尿器外科に人がたくさん集まり、さらなる発展・繁栄をすることを期待しております。退職後は、PSA前立腺がん検診の精度管理など、今まで大学では出来なかった地域に密着した診療を行い、三重県の地域医療に少しでもお役に立てるように頑張るつもりです。また、腎泌尿器外科教室のリサーチアソシエイト・名誉教授として、大学の研究と臨床を応援したいと思っております。最後になりましたが、今まで何とか無事に泌尿器科講座を維持できたのも、歴代の秘書さん、研究助手さん、そして何より私の我儘を聞いていただいた泌尿器科医局員と同門会の皆さんのお陰です。あらためて、17年間にわたりご支援・ご指導をいただいた全ての方に御礼を申し上げます、退任のご挨拶とさせていただきます。

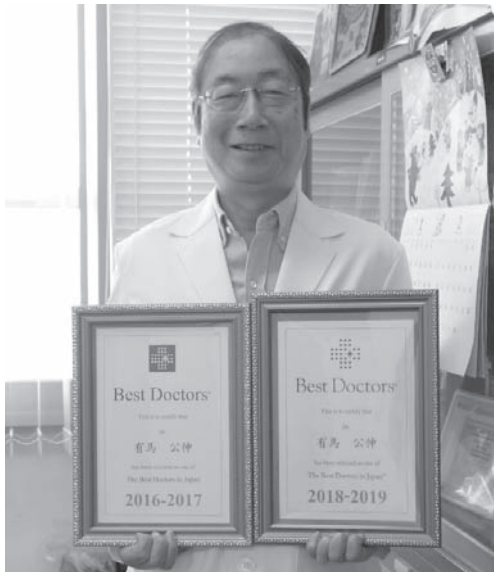
## 三重大学には長い間お世話になりました：

### 定年退職にあたり自己評価してみました

腎泌尿器外科 病院教授 有馬 公伸

10年以上前に、当時三重大学医学部附属病院院長の内田淳正名誉教授（前三重大学学長）から「三重大学のために頑張ってくれ、教授を名乗ってよろしいが外に出て行こうなんて考えたらあかんよ」とのお言葉とともに、病院教授の辞令を頂いたが、まさにそのとおりに定年退職まで三重大学にお世話になってしまった。

2回目の関連病院出向中の卒後10年目、仕事もアフター5も軌道に乗り楽しくやっていた頃、再三の「大学に戻って来い」との、ありがたーいコールを無視し続ける訳にもいかず、火中の栗を捨てる覚悟で大学に戻った時のことが鮮明に思い出される。大学人も長くなってくると、外科系臨床医は必然的に時間と労力の配分が、臨床および若



手の教育、研究、事務雑用でちょうど3分の1ずつの比率になってくるようである。三重大学の教員評価でもそれらの観点から評価されているし、定年退職にあたって、医学部ニュースに何か書くよう依頼を頂いたので、自己評価でもしてみようかと思う。

〈事務雑用〉帰って来て間もなく病棟医長を拝命し、大学ならではの難しい症例も含め、ほぼすべての手術を担当させていただいた。まるで学生時代の競技スキー部の合宿を彷彿させるかのように毎日24時間オンの病棟ベッタリ生活の数年間、大変だったが充実していた。それも終了したので再度関連病院に出向し、バリバリ手術が出来る日々に戻れると思ったのは束の間、川村寿一名誉教授が全国学会を主催されることとなったので、今度はその事務局の仕事させられることになった。今のようにコンベンションが何でもやってくれる時代ではなく、まるで学会屋にデューダしたかのように感じた毎日だったが、結局、退官されるまでの5年間、毎年連続で学会の主催となってしまった。杉村芳樹教授も何度か全国学会を主催されて解ったことだが、最近ではコンベンションが洗練され、かかる経費は倍に値上がりしたものの、我々の負担は軽減している。その他に日本泌尿器科学会東海地方会の事務局長を2度、通算8年間

指名されたので、さんざん雑用が回って来た。また今日まで4半世紀に渡り、教室の医局長と泌尿器科同門会事務局を務めたことになる。

〈研究〉大学院では研究テーマは『尿路結石』と言われただけだったので、最初は試行錯誤の連続であった。教科書は勿論、それらに記載されている参考文献などを読み込むうち、ノーベル賞を受賞された本庶佑先生ではないが、教科書に書かれている常識を疑い、180度真逆の仮説をたて研究を行った。その際、毎週連続5日間、朝6時から2時間ごとに夜2時までリアルタイムの測定を行う必要が生じ、半年間ナポレオン並の睡眠時間3時間で過ごすはめに陥った。その甲斐があって、尿路結石予防についてのコペルニクスの転回が得られた。ただ残念なことに、10年後にその結果が学会で認められ、教科書が書き直された時には、私の関心はすでに癌治療に移ってしまっていた。臨床研究の論文の執筆では、私が書いた論文中の見覚えのある図と同時に、私の名前が英文雑誌の表紙を飾ったことがあり、びっくりした事もあった。学会活動では、日本泌尿器科学会ばかりでなく、日本癌治療学会、日本泌尿器内視鏡学会、腎癌研究会などで何度もシンポジストを指名され、AUAやSIUなどの海外発表の他に海外でのシンポジウムがあたり、苦手の英語でのディスカッションをせざるを得ないこともあった。腎癌診療ガイドラインの作成委員にも指名され、強制的に大量の論文を読まされもした。仕切るのは好きでもないのに、日本泌尿器科学会の特別企画の司会や、日本泌尿器科学会関連以外にも、日本癌治療学会や日本内分泌外科学会など色々な学会の座長を指名された。

〈臨床と教育〉頻発する腹腔鏡手術による医療事故をきっかけに、2005年に突如、腹腔鏡技術認定制度が開始された。腹腔鏡手術の実技試験は、かなりハードルが高いものであったが、受けざるを得ない状況となった。話は変わるが、それより

少し前、カービングスキーの登場によりスキー教程が変更されるということがあった。川村寿一名誉教授ご退官2ヶ月前に主催された日本画像医学会の事務局長の任も無事終わり、それまでに溜まった鬱憤を晴らす必要があり、新しい教程でのスキー1級試験を受けに行くことにした。どちらの試験も、一発で合格しなければならないというプレッシャーは、同質のものであったと思っている。かたや助教授という立場、もう一方は医学部競技スキー部の元キャプテンという立場で。もっとも、around 50のロートルである私が、どちらもシビアな実技試験を、何で受けなければならないのかという若干の疑問は持ちつつであったが。



二人目の技術認定試験合格者が出たのは、三重県全体でも5年後であったが、中堅医師全員に技術認定医を取らせるべく、それこそ付きっきりで指導して来た。泌尿器科の腹腔鏡手術は大血管周囲の臓器を扱うので、事故が起こると生き死にに関わる大合併症となることがある。手術は実際にやらせてみないと上達しないとは言え、こちらはハラハラとイライラの連続で、私の心臓の血管にはかなりダメージがあったことは確かである。今まで当院泌尿器科では、腹腔鏡手術による大きな事故もなく、今日まで来れたのは幸いなことである。現在10人を越える技術認定医試験の合格者が出て来ており、最近は安心して見ていられるようになっているので、ご安心ください。

〈自己評価〉「いつまでボランティアをやっているの」などと言われながら、黒子に徹するよう努めつつ、今日まで誠実にやって来たつもりです。まあギリギリ及第点は取れたかなというのが、唯我独尊的な自己評価です。これまで多少の起伏はあるものの、恙無くやって来れましたのは、大勢の皆様のお蔭です。長い間、ありがとうございました。

## 転勤のご挨拶『産婦人科手術クラブ』

産科婦人科学講座・准教授 田畑 務

この度、平成31年2月1日付で、東京女子医科大学・産婦人科学講座教授・講座主任として転勤となりました。三重大学では、平成13年から約18年間勤務させていただき、在職中は皆様方に大変お世話になり、ありがとうございました。

三重大学では約18年間、学生指導ならびに研修医指導を任されました。5年生のクリニカルクラークシップでは、最初の産婦人科オリエンテーションの時に糸結びを教えてきました。タコ糸や

いろいろな糸を試してきましたが、最終的に伊賀の染め物屋さんに3mm程度の太さの糸を紅白に染めてもらい、それを用いて糸結びの指導を行ってきました。この糸は1本70円かかりましたが、医局費から費用を捻出いたしました。クリニカルクラークシップの産婦人科実習1か月間で最初に教えた糸結びの方法を練習し、実習最後の総括の時に糸結びをマスターしているかを実技試験として確認してきました。この指導を通して、かなり

の学生が外科手技に興味を示していただいたと自負しています。さらに、毎週月曜日の夕方17時から18時30分の間、『産婦人科手術クラブ』と題して、スキルズラボにて学生や研修医に手術手技を教える場を提供してきました。これは、クラブ活動のように自主的に手術手技をマスターしてもらい、研修医となった時には即戦力となる医師を育てようと考えて行ってきました。正直、毎週月曜日にこの時間を確保するのは、かなりの労力を要しました。けれど、参加してもらった人たちの手術技術が伸びていくのを見るのは楽しく、よほどのことがない限り続けてきました。一度に集まる人数は数人ではありましたが、長く通って来る学生はみるみる上達し、将来が楽しみな学生も出てきました。また、毎週学生に教えていると、どこがわかりにくいのか、どの手技が難しいのか、上手くマスターしてもらうにはどうしたらよいのか等、指導医のコツも掴めてきました。私としては

義務ではなく、楽しんで学生指導をしてこれました。これも、皆様のご協力の賜物と感謝申し上げます。今後は、これまでの経験を活かし、近いうちに、手術手技の基礎技術をマスターする方法を本として出版しようと考えています。

末尾になりましたが、このような機会を頂きました、三重大学医学部の皆様に感謝申し上げます。また、今後、三重大学の教官の方々が、楽しんで学生指導をしていただくことを願います。



平成31年1月21日は、最終講義ならぬ最後の『産婦人科手術クラブ』を行い、多くの学生に来ていただきました。

## 退 任 の ご 挨拶

ストレス健康科学分野 小 森 照 久

この3月末をもって、定年よりも1年早く退職しました。県立志摩病院に赴任していた半年間を除いて、大学院生時代を含め38年、学生時代を含めると44年を本学で過ごし、看護学専攻の教職員をはじめとして、多方面の教職員の方々には多大なお世話になり、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

私は高校時代から精神科医を志し、本学を卒業後、精神神経科学教室に入局しました。フロイトの精神分析、ハイデガーの哲学、禅やピカートの思想の影響を受け、人は根源的に不安をもって、人の健康や幸福は不安の克服だと考え、それを追求してみたかったからです。故・鳩谷名誉教

授が定年退官される2年前でした。2年後、教授秘書だった家内と結婚し、仲人は鳩谷先生でした。鳩谷先生は生物学的精神医学の大御所で、うつ病モデルラットの脳内の研究や内分泌精神医学の臨床研究を行っていて、研修を経て研究に参画しました。鳩谷先生の後には、故・野村名誉教授のもとで大学院に進み、うつ病モデルラットの中樞神経諸核におけるチロジン水酸化酵素活性の変化の研究で学位を取得しました。野村先生主催でフランス語の原書を読む勉強会が週1回早朝にあり、上達した結果、大学院をフランス語で受験し、合格して、野村先生に喜ばれました。

うつ病では甲状腺機能が正常下限程度の場合が

あり、このため通常の治療では遷延化することがありますが、少量の甲状腺剤を治療薬に加えると奏功しやすくなることを鳩谷先生らが明らかにしています。数多くの治療を行いました。また、甲状腺機能に関係なく抗うつ薬が奏功しないときに、甲状腺剤は抗うつ薬の作用増強に効果があり、難治性のうつ病を多く治療しました。

性周期に関連した非定型精神病では排卵誘発剤や黄体ホルモンの補完的治療が有用なことがあり、月経前緊張症でも同様で、こうした治療を数多く行いました。

周期性精神病では周期的発病を起こす間脳の不安定性が問題です。とくに周期性緊張病は気分障害圏なのか統合失調症圏なのか議論がありますが、間脳の不安定性の観点から統合失調症とは明確に区別されるべきです。抗精神病薬を使用すると悪化し、統合失調症とされて社会復帰ができない例が多いのではないかと懸念しています。入局4年目に典型的な周期性緊張病の一例を経験し、以後の臨床や研究に大きな影響を与えることになりました。退官された鳩谷名誉教授が奈良県の病院で診察し、三重大へ紹介してこられたのです。大量の甲状腺剤の投与によって寛解させることに成功しました。肝脳連関による17-ケトステロイドの代謝を指標として甲状腺剤の量を決定しました。この経験は、不安定性を創意工夫によって安定させるという一貫した研究テーマになっています。

学位取得後は精神神経免疫学の研究へ進みました。精神と免疫の関係は当時まだ始まったばかりの領域でした。アメリカへ留学予定でしたがレーガン政権の緊縮財政のおおりで研究費が凍結され、断念し、国内で唯一精神神経免疫学の研究をしていた久留米大学免疫学教室に国内留学し、研究手技を学んで三重大で研究を開始しました。抗うつ薬が免疫機能を抑制することを見出し、うつ病の免疫機能亢進仮説を提唱しました。炎症性サイトカインの1つであるインターフェロンでうつ病が生

じることがあるように、少なくとも一部のうつ病には当てはまると考えています。実験的に、ラットに拘束ストレスを負荷し、PCR法を用いて、脳内におけるインターロイキン-6と各神経系の関係を調べました。

精神神経免疫学の派生として、香りの効果の検証と臨床応用を行いました。香りの情報は直接視床下部に伝わり、視床下部は内分泌系や免疫系の中核的な役割を担っていることに着目したのです。実験的にラットを使って、抗うつ作用、抗不安作用、抗ストレス作用、睡眠改善作用のある香りを見出し、臨床応用を行い、一定の成果を得ました。多くが(株)資生堂との共同研究でした。科学的根拠に乏しいアロマセラピーとは一線を画しています。宇宙ステーションに香りを応用する計画に参画しましたが、予算の都合で中止になりました。

教授が代替わりをして助教授を務め、その間、教室の運営上いろいろな苦労がありました。何とか教室の機能、附属病院の外来・病棟の機能を維持しました。この時期はきわめてストレスフルでしたが、前述の香りの研究など好きなこともやっていたおかげで健全に過ごすことができたのかもしれない。鳩谷先生や野村先生から教えられた生体の恒常性や複眼的な視点などが研究のテーマであり、自己の健康を維持する考え方でもあります。

平成19年に縁あって看護学科の教授に迎えられました。これ以降はストレスの緩和の研究に重点を置き、香りの研究をさらに発展させ、アルケア(株)と疲労軽減に有用なストックキングの開発を行うなど複数の共同研究を行うとともに、熊野古道ウォーキングや忍者の技のリラックス効果の研究を行ってきました。特に忍者の研究では、印や息長(おきなが)という呼吸法がストレス対処に有用であることを客観的データで示すことに成功しました。忍者のコミュニケーション術など興味深いことがたくさんあり、今後も研究を続けていきます。とくに息長は応用範囲が広いと考えてい

ます。忍者と香りのそれぞれの研究成果については一般向け単行本を出しました（忍者「負けない心」の秘密：青春文庫、こころの疾患と香り：フレグランスジャーナル社）。まもなく「忍者『負けない心』の秘密」の英語版がアメリカで出版されます。熊野古道の研究が縁となり、尾鷲市の健康指針の作成に参与し、うつ病予防の講演会、DVDや冊子の作成も行いました。熊野古道や尾鷲市との研究は三重大学社会連携センターとの連携によるもので、(株)デンソーとの共同研究においても連携し、自動車運転のストレス軽減法を開発し、その成果は日本、アメリカ、ドイツ、中国の国際特許を申請中です。その他、(株)アヴ・オヴォとの共同研究として、高齢者うつ病や発達障害に対するホスファチジルセリン等含有サプリメントの有用性の検討を行うなど、幅広く研究を行ってきました。

教育面では、精神神経科学の講師や助教授時代にはポリクリなどの責任者を務め、留学生を含む大学院生の指導を行いました。さまざまな所で実習ではお世話になりましたと声をかけられることがあり、うれしく思います。看護学科では実習にも参加し、学部教育、大学院教育に励みました。こちらでも附属病院などで卒業生から声をかけら

れ、うれしく思っています。

管理運営面では、看護学科の大学院委員長を7年間務め、運営会議のメンバーも務めました。とくに大学院博士後期課程の新設にあたっては、畑下専攻長、林教務委員長とともに尽力し、平成28年に設置が認められ、看護学科は医学系研究科看護学専攻と生まれ変わり、この3月に第1号の修了生を出すことができました。

こうして、少しは三重大学医学部・医学系研究科のお役に立ち、一時代の苦労を除いて、やりたいうことをやらせていただき、自己実現をして悔いがないことを感謝しています。多くの方々との出会い、縁でできたことと認識しています。今でも趣味を楽しんでいますが、これからは人生をもっと楽しむ過ごし方をしたいと思います。一方で、長年の研究マインドは消えず、不安の克服と、存在の肯定による死と裏腹の生きることの神秘的意義についての研究と著述、講演をライフワークとして続けたいと考えています。今後は多度あやめ病院の名誉院長となりますが、三重大学名誉教授、三重大学客員教授として三重大学と関わりを続けていきます。とりあえずは、三重大学の今後の発展を祈念し、退職のご挨拶とさせていただきます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

## 教授就任のご挨拶“manifests”

大学院医学系研究科胸部心臓血管外科 高尾 仁 二



この度、2月1日付で胸部心臓血管外科学講座の教授を拝命いたしました高尾仁二（本学昭和59年卒）です。

当教室は、成人・先天性心臓大血管疾患及び呼吸器

疾患に対する外科治療の診療、研究、教育を使命とし、県内外の関連施設とともに発展してまいりました。その萌芽は昭和28年の三重県立医科大学高茶屋分院における結核外科です。その後、京都大学より助教授として着任されていた久保克行先生が昭和32年4月1日に本邦で2番目となる胸部外科講座の初代教授に就任され正式に開講となり

ました（久保教授は昭和32年3月21日に肺癌に対する肺葉切除術を、同年5月には心疾患手術第一例目のBeck手術を成功されています）。

国立移管により当教室が三重大学胸部外科講座となるのは昭和50年4月1日ですが、それ以前には昭和39年に四国で初の開心術成功（高知赤十字病院での房室欠損症根治術）、神戸市立中央市民病院への医師派遣に続き、高知市民病院（現、高知医療センター）、公立豊岡病院、塩浜病院（現、三重県総合医療センター）、安城更生病院に診療科を開設しており、国立移管後も山田赤十字病院（現、伊勢赤十字病院）、松阪中央総合病院、国立静澄病院（現、三重中央医療センター）、浜松医療センター、永井病院、新宮市立医療センター、松阪市民病院、桑名市立医療センターに診療科を開設し県内外で教室員が活躍しております。

久保克行初代教授以降、本学・教室の先輩である草川實先生、矢田公先生、新保秀人先生が歴代教授を務められた60年を超える本邦でも有数の歴史ある胸部外科教室を受け継ぐ大任に身の引き締まる思いです。もとより私個人は微力ではございますが、大学を中心としてこれら多くの関連施設の諸先生方の協力を頂き、教室、三重大学の更なる発展のために全力で臨む所存でございます。

私は昭和34年に津市で生まれ、津市立南立誠小学校、津市立橋北中学校、三重県立津高等学校を経て、三重大学医学部に入学しました。卒業後は直ちに三重大学胸部外科教室（草川實教授）に入局し、一年間の大学病院（胸部外科・第一外科）での研修後に中勢総合病院（現、鈴鹿中央総合病院）外科でトレーニングを受けました。その後、大学病院に戻り、心臓血管外科と呼吸器外科の診療に従事するとともに大学院博士課程を修了し、気管支粘膜血流量変化による肺移植拒絶反応の非観血的早期診断法の開発で平成2年に学位を授与されました。その後は、平成3年7月からの2年間のPapworth病院（イギリス、ケンブリッジ）

への研究留学期間を除き、大学病院で診療・研究・教育に従事しております。平成10年には専門を呼吸器外科に特化し、肺悪性腫瘍に対する抗がん剤感受性試験（臨床検査医学：登 勉先生、中谷 中先生との共同研究）、低侵襲手術、根治的縮小手術をメインテーマとしています。平成12年より講師、平成16年より中央手術部副部長・助教授（准教授）を平成28年まで務めさせていただきました。平成21年に病院教授、平成23年に呼吸器外科診療科長、平成28年11月に大学院医学系研究科胸部心臓血管外科の准教授を拝命しました。この間、特に呼吸器内科、放射線科（画像診断、放射線治療、IVR）、病理の先生方、技師の方々には大変お世話になり、肺腺癌早期・初期病変に対する診断、蝕知不能病変の術前マーキング、造影CTでの肺動静脈3D再構成、気管・気管支内悪性腫瘍に対する腔内照射、肺悪性腫瘍に対するラジオ波焼灼治療などが普及する以前の段階において挑戦・実践し、オピニオンリーダーたりえたと自負しています。これらの診療・研究実績は、現在では、三重大だからこそ可能な集学的治療といえる域にあるのではないかと考えております。改めて、この紙面を借りて皆様に御礼を申し上げるとともに、更なる多診療科からなるチーム医療の推進をお願いしたいと思っております。

我々の診療科に於きましては、目覚ましい医療技術の発展に伴う専門性の高度化に対応すべく各グループで国内・国際水準を意識した先進外科手技の導入と標準化、治療体系の確立を目指して努力しております。一方、専門高度化するあまりmicrosystemの弊害としての限られた者しかその妥当性を判定できないというような閉ざされた専門性に陥らないように、関連診療科との相互連携を強化して開かれた診療科として皆様の信頼を得たいと考えています。我々は手段としての手術や手技に価値を見出すだけでなく、人を癒すことを見失わずに『鬼手仏心』を体現するチームを目



指します。

また、研究でも当教室は本邦での開心術黎明期をリードし、人工心臓の実験的開発、心臓・肺移植の基礎研究でも地方大学ながら国内のトップグループでした。しかし、その後の外科離れ、卒後研修システムの改革などの影響もあり、若い医師のキャリアプランも大学院・海外留学から臨床・専門医志向となり、当科での大学院入学者も極端に減少したために研究テーマの継承も困難になっていました。ところが、最近では、大学院入局を希望するスタッフが続いており、新たなテーマに挑戦中です。特に、基礎系教室、他学部、企業とのcollaborationにより多くのチャンスを掴み、新しいことを見出す喜び、課題解決を工夫し、考え、ディスカッションする意味を学んで欲しいと願っています。臨床での失敗は許されませんが、実験・研究では失敗すること、それを糧に挑戦することが許されますので、若いスタッフには自分の学問的興味をそのような場で存分に開放して、才能を開花させて欲しいと思っています。

教育に関しては、我々のスタッフは皆、教え好きです。昔から、我々の医局にはそのような文化が根付いていたように思いますが、残念なことに教える後輩がないという時代が長く続きました。幸い、最近、心臓血管外科、呼吸器外科を志望してくれる学生さん、研修医の先生が増えてきており、毎年、複数の入局者が期待できる状況です。その上、みなさん、スマートでありながら、粘り強いです。そのような優秀な若者を健やかに育むことが教育でしょう。適切な環境さえあれば、すくすく伸びていく可能性と力強さが彼ら彼女らには溢れていますし、その輝きは教える側の我々にも活力を与えていると思います。教育こそが、我々の原動力であると実感しています。

その中で、教授として私に求められるものはリーダーシップではありますが、自分の役割は、胸部心臓血管外科と一緒に働いているスタッフやこ

れから我々と一緒に働く研修医、学生さんが育ち、活躍するための環境（畑）を“耕す”イメージです。

～畑を耕し、種を蒔き、肥料を与える。日の光を浴びてスクスク育てと、毎日、十分な水を与えて、時には雑草を抜き、害虫を駆除する～

指導する、導くというより、（若い芽が自分で）育つ場所を整え、“耕す”ことで、胸部心臓血管外科領域でプロフェッショナルとしてのプライドを持ち、その日常業務を「仕事」ではなく「天職」として自然と自覚するような骨太な医師を送り出したいと願っています。

自分たちが感じていたように、胸部外科のスタッフであるという密かな自負を今の若いスタッフに取り戻すために。

#### *Epilogue*

因みに、私の専門は呼吸器外科ですが、心臓血管外科と呼吸器外科が分離していない胸部外科教室の教授を呼吸器外科を専門とする者が務めることは稀です。過去には金沢大学の渡邊洋宇教授、現在では新潟大学の土田正則教授がご活躍されていますが、当教室でも過去4代は心臓血管外科を専門としておりました。

胸部外科学会などでは、心臓血管外科医は「肉食系」、「狩猟民族」、呼吸器外科医は「草食系」、「農耕民族」と一般的に例えられることが多く、私の挨拶の最後が農耕での例えになってしまった事にも妙に納得しています。

さらに蛇足ですが、“耕す”は英語で「cultivate」で、「culture（文化）」とはともにラテン語の「colere」から派生した言葉だそうです。“耕す”が自分の役割ですと書いてしまって、少し地味かな？と後悔しかけていたのですが、“耕す”は“文化”の創生につながると解釈してそのまま原稿を提出することにしました。

胸部外科教室の長い伝統の中での今回の小さな異変により、我々の教室のイメージも少し変わる

のではないかと思います。それが少しでもよい方向へ化学反応し、教室の再スタートへの起爆剤となり、新たな価値の創造につながるように教室員、

同門一同で努力いたします。

学内の皆様には、何卒、ご指導とご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。

## 医学系研究科看護学専攻長への就任にあたって

看護学専攻長 林 智子



2019年4月1日より、看護学専攻長に着任いたしました。

「進取果敢」とは、失敗を恐れずに自分の意志で積極的に物事に取り組むことをいいます。これを座右の

銘とし、与えられた使命を全うしたいと考えています。

三重大学における看護学教育は、1998（平成10）年に短期大学から医学部看護学科となった時から4年制の大学教育として始まりました。そして、2002（平成14）年に大学院医学系研究科修士課程看護学専攻、2016（平成28）年には悲願であった博士後期課程看護学専攻が開設されました。2019（平成31）年3月に第1号の博士後期課程修了生を輩出し、看護学の学問体系として完成しました。これまでの20年以上の歴史と伝統を大切にしつつ、変化する社会の要請に応えながら看護学専攻の発展に尽力し続けていく覚悟です。

まず、看護学の学部教育の動向として、日本看護系大学協議会に加盟している4年制看護系大学の数が2018（平成30）年10月現在で277校となり、急激な増加を示しています。本学が4年制になった頃は100校程度であり、この20年間に3倍近くの数になっています。このような状況のなかで、2017（平成29）年10月には文科省より看護学教育モデル・コア・カリキュラムが提示され、2018

（平成30）年10月には日本看護系大学協議会により日本看護学教育評価機構が設立されました。これらのことは、大学教育としての看護基礎教育が社会的に認知されたこと示す証拠であると共に、目まぐるしい社会の変化に対応できる看護学教育の質的充実が求められていることを示しています。本学医学部看護学科での学部教育においても、時代の要請を鑑み、三重大学の強みを活かした新しいカリキュラムの策定に取り組んでいます。日本看護学教育評価機構の分野別評価も視野に入れながら、本学の20年間の教育の実績を盛り込み、知恵を出し合い、学生が看護専門職として自信をもって巣立っていけるようなカリキュラムにしていきたいと考えています。

二つ目に大学院教育に関しては、博士課程（前期・後期）という立派なインフラは整いましたので、次の使命は大学院教育内容の充実だと考えています。博士前期課程では看護管理学分野を新設し、看護教育学分野上級実践者（CNE）コースを増設し、修士論文コースと高度実践看護師コースの教育内容の充実を図ります。また、博士前期課程・後期課程共に、学生自身の主体性を尊重し、自律的に研究に取り組めるような教育支援体制と学位論文審査体制の充実を図りたいと考えています。

三つ目に看護学専攻の教員組織に関しては、学部教育と大学院教育の質を担保すること、看護学の発展に寄与する研究業績を上げること、大学人

として地域に貢献することなど、限られた人数の教員に多くの任務が課せられています。2016（平成28）年に部局化し医学系研究科教員となったことを踏まえ、多くの期待を背負って発展してきた組織運営を見直し、医学系研究科看護学専攻の教員組織としてのあるべき姿を考える必要があるのではないかと考えています。教員一人ひとりが今

以上に自律的にやりがいをもって働ける組織運営を目指していきます。

最後に、看護学専攻の発展のため、医学系研究科長を始め諸先生方にご指導を賜りながら取り組んでいく所存です。何卒、よろしくお願い申し上げます。

## トピックス

### 大学院医学系研究科生命医科学専攻（博士課程）、 医科学専攻（修士課程）の入学試験実施状況について

大学院委員会 山崎 英俊

平成31年度の大学院入試は、医科学専攻（修士課程）、生命医科学専攻（博士課程）ともに、平成30年8月と平成31年1月の2回行いました。生命医科学専攻（博士課程）入試では、合格者（入学者）53名（8月入試22名、1月入試31名、うち国費優先配置5名）でした。このうち、平成30年度10月入学は17名で、国費優先配置制度による留学生の入学者（平成30年10月入学）は4名（修士課程からの延長2名を含む）です。国際推薦制度による留学生の入学者（平成30年10月入学）は、0名でした。国費優先配置特別プログラムが終了し、留学生の入学者数が今後減少していくことが考えられますので、国際推薦制度と全学の私費外国人留学生特待生制度を活用し、私費留学生の受入れを継続していきたいと考えています。30年度の1月募集は志願者が25名でしたが、31年度は昨年度に比べやや増加し、31名の志願者となりました。博士課程合格者53名中、社会人入学者（昼夜開講制）は16名（うち医師14名）でした。医師は合計39名で、全体の約74%です。また、三重大学医学部医学科卒は25名で、本学修士課程からの進

学者は2名でした。本年は昨年に比べ、入学者が増加しております。例年同様に博士課程への進学時のアンケート調査を行いました。博士課程への入学を決めたのは10月以降が多く、ホームページ或は先生のアドバイスや研究室訪問、入試説明会が決め手になっているようです。各講座の先生方に貴重なお時間をいただき、毎年6月に修士・博士の合同入試説明会を開催しておりますが、今後はホームページの充実を一番に、入試説明会の簡略化を進めてゆきたいと考えております。

医科学専攻修士課程は、昨年は8名の入学者を得ましたが、31年度は8名（8月入試3名、1月入試3名、10月入学2名）で4名の不足となりました。国費優先配置制度（平成30年10月入学）による留学生の入学者は（2名）でした。出身学部の内訳は、保健学系4名、生命科学系2名、工学系1名、人文学系1名です。30年度は修士課程の入学定員を確保するため、昨年度に引き続き6月と11月に大学院入試説明会を行いました。医学系研究科の修士課程・博士課程の具体的な生活内容がわかるように修士課程から博士課程へ進学し、

修了された方に研究或は学生生活も含めた体験談をお話いただきました。昨年6月の説明会では16名の参加があり、そのうち、1名が修士課程、4名が博士課程へ出願をされました。11月の説明会でも2名の参加があり、そのうち1名が修士課程、1名が博士課程へ出願されました。一昨年より説明会の参加者は多くなりましたが、説明会の効果は少ないように思います。今後、入試説明会の在り方を検討する時期にきているのかもしれませんが。昨年度、ご協力いただいた先生方には深謝いたします。

減少する修士課程希望者への対策としては、1) 病院職員のキャリア形成の1つとしての大学院修士課程の意味付け、2) 公衆衛生学を中心としたMPH (master of public health) コースの運用 3) 医学研究科以外の他研究科との連携による入学を考えております。現在、昼夜開講制度や長期履修制度を導入しました。授業料免除等の経済的な支援が重要である事がわかっていますので、限られた予算の中で経済的支援の拡大に向けて努力をしたいと思っております。また、附属病院の職員に対しては、実務経験5年以上の職員を対象に、入

学料・授業料の免除制度(三重大学医学部附属病院職員支援事業)がありますので、こちらも活用していきたいと考えています。加えて、現在、奨学金の返還免除制度も修士課程に1枠、博士課程に1枠ありますので、ご利用いただきたいと思います。

最後になりますが、本学医学系研究科では、28年度から実施しております定員改訂(博士45名、修士12名)により、時代に適合した質の高い、少数精鋭の教育を目指しております。博士、修士ともに、より魅力的で、より教育効果の高い、世界に誇れる大学院になれるよう今後も更なる創意工夫を行ってまいりたいと考えております。多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)」養成プラン、基礎研究医養成活性化プログラムが進行中ではありますが、国費留学生優先配置特別プログラムは事業期間が終了しました。大学院修士・博士課程も時代とともに変わって参りますので、カリキュラムの見直し等を行い、時代に即した大学院教育を提供していきたいと考えています。今後も大学院運営への皆様のご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

## 大学院医学系研究科看護学専攻の修了・入学状況について

看護学専攻大学院委員会委員長 辻川真弓

看護学専攻は、2016年度に博士後期課程を設置し、定員を上回って11名の大学院生(博士後期課程)が在籍しており、2018年度には完成年度を迎えました。3月には、1名の修了生を輩出することが出来たことから、三重大学における看護学博士第1号が誕生しました。これは、大学院生だけでなく、私たち教職員にとっても嬉しい出来事の1つでした。これまで、博士課程設置に向けてご支援をいただきました方々に、深く感謝申し上げます。

ます。

博士前期課程(一部の大学院生は修士課程)については、11名が修了しました。その内訳は、看護教育学2名、がん看護学2名(CNSコース1名、論文コース1名)、成人看護学1名、老年看護学2名(CNSコース2名)、母性看護・助産学2名、小児看護学1名、精神看護学1名でした。11名の修了生たちには、それぞれの道があり、大学院での学びを臨床で活かす人、専門看護師としての道

を目指す人、看護教育の現場でさらに磨く人、博士後期課程に進学しさらに研究を学ぶ人など様々ですが、皆さんのこれからが期待されています。

大学院看護学専攻の2019年度入学生については、博士後期課程は、定員どおりの3名であり、その内訳は、看護教育学、母子看護学、精神・ストレス健康科学の各1名でした。また、博士前期課程については、定員11名のところ、入学生は5名となりました。その内訳は、実践基礎看護学1名、がん看護学1名（CNSコース）、精神看護学2名、地域看護学1名でした。今年度は、前期・後期課程合わせて8名の入学生を迎え、大学院生の皆さんが、同期の院生どうしの横のつながりだけでなく、先輩や今後迎える後輩たちとの縦のつながりも作りながら、大学院での2年～4年の時間を十分に学んで欲しいと願っています。また、看護学

専攻の教員とともに、看護学専攻が、三重県における看護学教育・研究の拠点となるよう共に研鑽したいと考えています。

看護学専攻の今後の課題ですが、博士前期課程については、まずは定員の充足を目指します。具体的には、看護管理学分野やClinical Nurse Educator（CNEコース）を新設するなど、教育・研究の充実を図ります。博士後期課程では、「俯瞰的視野」をもち、他の学問領域等と協議しながら新たな知見を導き出し、地域に根差した独自性豊かな看護学研究成果を生み出すことのできる人を育成しています。完成年次を過ぎましたので、今年度は、さらに博士課程後期課程の教育および研究が充実できるよう改善していきたいと考えています。

## 平成31年度医学部医学科入学者選抜結果について

医学科入学試験委員長 成 田 正 明

平成31年度入試募集人員は推薦40名（一般枠10名、地域枠A 25名程度、地域枠B 5名程度）、前期日程75名（一般枠70名、三重県地域医療枠5名程度）、後期日程10名の計125名であった。

推薦入試では138名の志願者があった。大学入試センター試験（1月19、20日実施）の成績により一次選抜を行い、2月11、12日に小論文、面接を行った。その結果、40名が合格した。

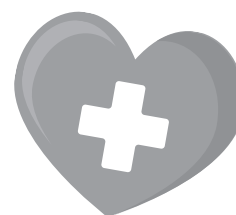
前期日程試験は2月25、26日に行われた。271名の志願者があった。2月25日に数学、理科、外国語の試験が、26日には個人面接が行われ、75名が合格した。

後期日程試験は3月12日に小論文と個人面接が行われた。志願者は138名であったが、1次選抜（定員10名の10倍、100名）の実施、および後期

日程では欠席者（推薦・前期日程試験合格者）が多いことから、実際に受験したのは38名であった。10名が合格した。後期日程において1名の辞退があり、1名が追加合格した。

最終的に125名が入学手続きをした。

試験の実施に御助力いただきました諸先生方に深謝いたします。



## 平成31年度医学部看護学科入学者選抜結果について

看護学科入試委員長 辻 川 真 弓

医学部看護学科では、平成29年度入試より、推薦入試の募集人数を20名に増やし、地域枠での募集を拡げてきた。三重県の優秀な人材が卒業後も三重県で看護職として働いてくれることを目指している。募集人数の内訳は、昨年と同様で、推薦入試20名（地域枠13名程度を含む）、社会人特別入試3名、前期日程52名、後期日程5名の合計80名であった。

看護学科入試は、平成30年8月24日の社会人特別入試からスタートした。社会人特別入試とは、5年以上の社会人経験があり、本学科に入学を希望する者を対象としている。TOEIC500点以上を出願要件とし、試験科目は小論文および面接であった。その結果、2名の志願者があり、合格者は1名であったが、残念ながら入学には至らなかった。

推薦入試については、第1次選考は平成31年2月6日に実施し、志願者は74名と多く（昨年は55名）、大学入試センター試験の成績に基づき、定員の1.5倍の30名を選抜した。第2次選考は2月11日に実施し、面接試験を行い、地域枠17名を含む計20名が合格し、全員が入学手続きを行った。

前期日程は、2月25日に英語、2月26日に面接試験が行われた。今年度の志願者は118名と少なかったが（昨年150名）、実際には94名の受験者となった。その結果55名が合格し全員が入学手続きを行ったが、その後1名の入学辞退者があり、追加合格者で補った。

後期日程は3月12日に実施し、小論文と面接試験が行われた。134名の志願者があったが、実際には41名が受験し、5名が合格し全員が入学手続きを完了した。

最終的には、推薦入試20名、前期日程55名、後期日程5名の合計80名が入学手続きを完了し、三重県内出身者43名（53.8%）、県外者37名、男性5名、女性75名であった。

一方、3年次編入学試験は、TOEIC500点以上を出願要件とし、1名の応募者はありましたが、試験を欠席されたため入学者はありませんでした。

最後になりますが、看護学科の入学試験にご協力をいただきました、教員ならびに事務職員の方々に心より感謝申し上げます。

## 平成30年度解剖体感謝式報告

教員代表 溝 口 明

平成30年10月16日、三重大学三翠ホールにおいて、平成三十年度解剖体感謝式が挙行されました。午前11時30分より、片山直之医学部長から、ご遺族に、文部科学大臣からの感謝状の贈呈式が行な

われました。昼食後、ご遺族をお迎えして、三重大学医学部教職員一同、医学部医学科・看護学科学生一同による解剖体感謝式が執り行われ、片山直之医学部長からの感謝の言葉に続いて、医学部

学生代表、教員代表、三医会会長からのご尊体を捧げられた故人への感謝の言葉が献花と共に、医の礎のご霊前に捧げられました。感謝式に続いて、別室にて、ご遺族にご遺骨が返還されました。当

日は、好天に恵まれ、成田正明教授および医学部事務の多くの方々の入念な準備と、学生有志の自主的な協力もあり、三重大学医学部として、感謝の心を大切にした感謝式が滞りなく遂行されました。

## 平成30年度白衣授与式について

クリニカルクラークシップ委員長・小児科教授 平山雅浩

平成31年1月10日(木)、講堂大ホールにおいて、平成30年度白衣授与式が開催され、新たに医学部医学科4年生126名が白衣を授与されました。白衣授与式は、医学科4年生が臨床実習を開始するに先立ち、プロフェッショナリズム・臨床倫理教育の一環として平成19年度より実施しているものであり、今年度は130名を超える多くの保護者の方々も出席されました。

白衣授与式では、最初に、医学生として臨床現場に立つにあたっての心構えについて、駒田美弘

学長、片山直之医学部長、伊藤正明病院長からそれぞれ具体的な例が示され、激励のお言葉がありました。続いて、成績優秀学生に対する表彰が行われ、学長賞及び医学部長賞がそれぞれの学生へ授与されました。その後、片山医学部長をはじめとする8名の授与者からすべての学生に白衣が授与され、学生達は真新しい白衣に袖を通し、医療人となることを志す者としての自覚・決意を新たにしました。



## 平成30年度（第24回）医学部公開講座の開催

地域・国際交流委員会委員長 ガバザ エステバン

平成30年11月11日（日）に三重大学医学部先端医科学教育研究棟基礎第一講義室において、三重大学医学部の市民公開講座が開催されました。こ

の医学部公開講座は、研究成果を地域の皆様に還元することを目的として、健康・医療・保険・福祉に関するテーマで一般市民を対象とした公開講

座であります。会場には合計54名、20歳未満から80歳代以上までの市民にご来場いただきました。今回の公開講座は「三重大学が取り組む地域医療」と題し、健康と日常生活を中心に取り上げました。

最初の基調講演では、三重大学大学院医学系研究科腫瘍病理学分野の渡邊昌俊教授から「The 病理医：病理医とともにがんを考える」と題したご講演を頂きました。渡邊教授の講演の中では多くの方が馴染みのない「病理」や「病理診断」や「病理医」という言葉についてわかりやすい説明があり、「病理」の分野、がんなどの疾患の診断・治療での「病理医」の重要な役割、国の政策として進められているがんゲノム医療への「病理医」の関与などについてご紹介をしていただきました。次の基調講演では、三重大学医学部附属病



院リウマチ・膠原病センターの中島亜矢子教授から「ここまで進んだりウマチ膠原病の診療」と題したご講演を頂きました。中島教授の講演の中ではリウマチ・膠原病の病態、発症の原因、頻度、臨床所見の特徴などについてわかりやすい説明があり、またそれらの最新の診断法、治療法などについてもご紹介していただきました。参加者は興味深く二人の講師の話に耳を傾けていました。

最後に、参加者に公開講座の印象などについてのアンケートをしましたところ、今年も医学部公開講座は高く評価され、大成功のうちに終了しましたことを実感いたしました。本年度の医学部公開講座に参加していただいた方々、講師をしていただいた先生方、準備をしていただいた方々に心より感謝を申し上げます。



## 三重大学病院主催市民公開講座『がん最先端医療』を開催



平成30年12月11日（火）イオンシネマ津にて、三重大学病院主催による市民公開講座『がん最先端医療』が開催されました。

三重大学病院では、がんの種類や患者さんの病態に応じた最先端の医療を行っていることから、“今、知っておくべきがんの話”として、本院の最先端の医療を市民に知っていただくために開催されたもので、会場満席となる400名の市民の方にご参加いただきました。

感染制御部新居看護師長（広報担当看護師長）



より、開会挨拶、今回の公開講座の趣旨が説明された後、本院における最先端のがん医療が5つの題目により講演されました。また、ブレイクでは、伊藤正明病院長より、患者さんに最も適した最先端の治療に病院が総力を挙げていることなどが述べられました。

講演1 「痔がんもここまで治る」

演者：肝胆膵・移植外科教授、副病院長  
(診療担当) 伊佐地秀司先生

講演2 「最先端のロボット手術」

演者：産婦人科講師 近藤英司先生

ブレイク「三重大学とがん治療」

伊藤正明病院長、中瀬一則がんセンター長

講演3 「がん治療後の妊娠」

演者：産婦人科助教 西岡美喜子先生

講演4 「肺がんの最新治療」

演者：呼吸器内科助教 藤本源先生

講演5 「胃がん・食道がん・大腸がんの  
最先端手術」

演者：消化管外科准教授 大井正貴先生

最後に、佐久間肇副病院長(研究・広報担当)司会で活発な質疑応答があり、盛況のうちに閉会となりました。今回の公開講座は、がんの最先端医療がテーマとなったことから市民の関心も高く、充実した公開講座となりました。また、会場の収容を大きく上回る1000名ほどの市民の方々にお申込みいただき、市民県民の皆様の期待と関心が高いことを感じました。

ご参加いただきました市民の皆様方、また、開催にあたりご協力いただいた関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

## 平成30年度教育貢献賞を受賞して

分子病態学 准教授 朴 恩 正



この度は、平成30年度教育貢献賞を受賞させて頂きました。私は平成12年に大阪大学大学院医学系研究科で清野宏教授(現、日本免疫学会理事長

兼東京大学教授)の指導下で、特殊な腸管上皮間リンパ球の炎症誘発に対する新たな防御機序モデルを提示する免疫学研究でPhD学位を頂きました。その後、アメリカハーバード大学医学部島岡要教授(現、三重大学医学部教授)研究室でインテグリン活性化制御機序の解明と該当モデルマウスリンパ球の生体内組織特異的なホーミングに関する研究を遂行しました。平成24年度から東京大学医科学研究所で特任助教として勤めさせていただきながら、粘膜ワクチン・アジュバントの研究開発プロジェクトに参加したあと、平成26年10月から現職に至っております。この20年間の日本とアメ

リカでの研究経歴期間の間、真理探究を目指す研究者としていつも胸に刻んできたことは、苦勞を大切に思い、失敗を恐れずに未来に向けて挑み続けることでした。三重大学大学院医学系研究科は、今まで私が自ら体得・実感してきた、研究者としての研究経験から得られた内容を学生に教えてあげることができる大切な場であると思っています。

私は、現在、分子医学の実習指導と教育を担当させていただいております。分子医学実習は、タンパク質実習、免疫実習、微生物実習、核酸実習の4科目で構成しています。その中、私は、生物体の最も基本要素である核酸の科目の役を勤めさせていただきながら、各科目講座の担当教員達に公知を示達、また、成績を収集・通知する取りまとめ役も担当させて頂いております。核酸実習は分子病態学講座の担当科目で遺伝子・染色体について研究する分野であります。実際に、マウスの血液から染色体を分離しこの染色体DNAを鋳型として使用し、細胞接着分子の一種である $\alpha$ Lインテグリンの遺伝子断片をポリメラーゼ連鎖反応(PCR)の方法で増幅させ電気泳動で確認する一連の実験過程の実習を教えています。特に、まだ実験に熟練されていない学生達に実習に興味を掻き立てながら身に付くよう慎重に指導します。さ

らに、実習方法の教えだけでなく、実習過程内1つ1つの項目が実験目的を遂げるためになぜ必要なのかの問いに対し、分子生物学的な原理を的確に説明しながら学生が自ら理解に至るように教育しています。また、PCRのような実験メソッドが、なぜ使わなければいけないその科学的な根拠や、この方法が身につけることによって将来行われる基礎・臨床研究分野での応用に役立つ可能性などを、伝えたいという使命感を持って教育しています。

分子病態学講座には10人の博士課程学生が属されています。その中、4人が日本人、6人が外国から来られた学生で、皆頑張っています。学生に関連研究の最新動向をフォローアップできるようにするため、論文熟読後に学生が研究方法と結果を説明できるようにしています。研究指導は、仮説と目的に基づいて研究するようにしながら、実験結果についても十分なディスカッションを通して、コミュニケーションスキルも増進できるようにしています。

以上、本賞を頂けるようにきっかけを作ってください。本学の先生方の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 平成30年度教育貢献賞を受賞して

医学・看護学教育センター 望木郁代

この度、平成30年度教育貢献賞をいただき、大変光栄なことと感謝申し上げます。平素は、医学部学生なんでも相談室で学生さんを支援する仕事に携わらせていただいております。これを機会に、医学部に相談室があることを知っていただけましたら大変うれしく存じます。

平成23年4月、医学部に学生相談室が設置され、心理相談、修学相談、進路相談、メンタルヘルス講義などを中心に活動しています。年間利用者数は約100名(のべ)です。医学部独自の相談室がある意義は、進路についての疑問や不安、実習での戸惑い、狭い人間関係、国家試験など、学

部特有のニーズに応えられることであると思います。その他、長期フォローアップ、年間カリキュラムの把握、学部内の関係部署との連携など、実効性のある場所として機能するために設置されていると考えております。学生相談室はあくまで大学教育の一環としての機能を果たさねばなりません。学生さんのこころの支えとなり、成長につなげられるような場所でありたいと切に願っております。

関係の皆様のご協力なしには今回の受賞はなかったと深く感謝しております。学生委員長の西村有平先生はいつも私を励ましてくださり、カウンセラーのカウンセラー的役割を果たしてくださ

います。教育センター長の堀浩樹先生、教務委員長の島岡要先生には、迅速で的確な指示とアドバイスで、進むべき正しい方向をお示しいただいております。また、保健管理センターの谷井久志先生が親身になって学生さんに対応して下さるおかげで、私はとても心強く活動することができます。歴代学生委員長の先生方にも大変恵まれました。そして、困ったときに助けてくださる諸先生方、学務課の皆様、教育センターの皆様、相談室を支えてくださるすべての方へ、この場をお借りしまして心より御礼申し上げます。これからも一生懸命努めてまいりますので、ご指導の程よろしくお願い申し上げます。

## はまゆう祭実行委員長より 医学部の皆さんに一番読んでいただきたい文章

第39回三重大学医学部はまゆう祭実行委員長 椋野 拓

### 新入生の皆様へ

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんは高校時代ないし浪人時代の努力が報われ、この春晴れて三重大学医学部生となられます。これから益々勉学に励まれ、充実した毎日を送って行かれる事と思います。

医学部は医学科の6年という在学年数の長さや、看護学科の実習の多さなど、他の学部と異なる部分が多い為、医学部だけのコミュニティを作りがちです。三重大学は単一キャンパスに全学部が所属する珍しい大学にもかかわらず、医学部だけがその利を活かしきれていないように思います。

しかしこれはあくまで『これまで』の話です。私自身未だ大した医学的知識も持ち合わせていない入学三年目の学生ですが、将来医師になる学生として医療に関わる過程で、人を幸せにする為には医療だけでは足りないと感じておりま

す。少子高齢化が進み地方の過疎化も進む現代の日本で、生きていて良かったと思う為には、街があり自分の家族が側にいて、尚且その家族が働く為の様々な職があり、自分の子供が満足に教育を受ける為の教育機関が無ければならないのです。医療は命に直接関わる為、無くてはならない重要なものですが、それ一つだけではどうにもならないのです。

そんな時代に入学された皆さんには、6年間で医学を極めるだけでなく、是非医療以外の様々な事に関わる学生生活を送って頂きたいと思います。その為に必要なものは三重大学の中に全て詰まっています。しかしその糸口は黙っていて皆さんの前に差し出されるものではありません。是非、学内の様々なイベントや集まりに積極的に参加し、様々な学部、年齢の人と直接コミュニケーションをとってみてください。大学で何をすべきか、

何をしたいかが見えてくるはずです。能動的に過ごした6年間は、皆さんを新時代の医療界におけるリーダーへと育ててくれるはずです。

### 医学部はまゆう祭について



医学部はまゆう祭は三重大学の学園祭と共に医学部の学園祭として催されるイベントです。これまで毎年医療に関係のある方をお呼びして講演会を開いて頂いておりました。今年は僕がその実行委員長に任命して頂いた訳ですが、僕には医学部生としてやりたい事がありました。先程述べさせて頂いた、医療だけではどうにもならないという話にも繋がることなのですが、それは医学部と他の学部の間にある溝を取り払いたいという事です。この場でわざわざ言わねばならない程、医学部は他の学部と関わろうとしませんし、他の学部からは勉強至上主義の怖い集団と見なされているのです。そんなイメージを払拭する場としてはまゆう祭を使おうと思ったので壇上には僕自身が立ち、自分で講演会を開くことにしました。訳の分からない学生が話をするとと言っても誰も人は来ないと思い、開催の一ヶ月前から毎日SNSで動画を投稿しました。当日の会場には100名超のお客様にお集まり頂き、僕自身、大勢の人の前で滑るといふ貴重な体験をさせて頂きました。しかし会場には医学部関係者では無い方も少なからずいらっしゃっていて、医学部への印象を変え、親しんでいただくという当初の目標は僅かながら叶える事が出来たのでは無いかと思っています。

動画投稿や話題性のお陰で毎年よりも多くの方

にはまゆう祭を知って頂けたのでは無いかと思っています。来年度のはまゆう祭がどのような物になるかは実行委員長の一存ですが、いつかはまゆう祭が医学部の学園祭と言わず三重大学祭の一イベントとして医療や医学生の面白さを共有出来るような場になればと思います。そんな医学部、そんな大学になるようにと僕は残り4年間、大学生活を送っていきたいと思います。



会場からお帰り頂く皆様をお送りする当日の様子

### 井村屋の高カロリー豆腐



井村屋豆腐の炊き出しの様子

このはまゆう祭を行う上で様々なご縁に恵まれましたが、中でも最大のご縁は三重県津市の井村屋様とのご縁でした。三重県を代表する企業である井村屋は、あずきバーでお馴染み、あんこやあんまんの販売、豆腐の製造も行われています。医療を楽しく皆に広めたいというテーマで、三重大学組織学教授である溝口先生協力の元、井村屋様の広報の方と共に井村屋高カロリー豆腐の宣伝を行わせて頂きました。高カロリー豆腐とは高齢

で食が細くなってしまわれた方の為、少しの量の豆腐で必要なカロリーを取れるようにと、井村屋様と伊賀市立上野総合病院の三木誓雄先生の協力で作られた豆腐です。こちらの商品を当日宣伝させて頂き、医学部の皆で湯豆腐を作ってお客様に食べて頂きました。僕自身にとっても既に医療に様々な先生の他、企業が関わっている事を知れる機会になりましたし、現職の医師である先生方の

熱い想いに触れることも出来、一層充実した医学生を送らねばと思いました。

僕はこれからも動き続けます。学生の皆さん、一緒に楽しく充実した学校生活を作りましょう。先生方、しばしば目の前の事しか見えなくなり、勉強が充実しなくなって焦ってしまう私ですが、今後ともご指導の程よろしく願いいたします。

## 三重大学医学賞、病院賞、病院教育賞について

副病院長（働き方改革担当） 近 藤 峰 生

2018年12月14日（金）の18時30分より、三重大学病院大忘年会に先立ち、平成30年度三重大学医学賞、病院賞、病院教育賞の表彰式がホテルグリーンパーク津にて行われました。これらの病院賞は昨年より伊藤病院長の発案によって始められました。三重大学医学部医学系研究科あるいは附属病院に勤務する大学教員または医員の中から、過去1年の間に特に医学研究において顕著な功績が認められる者に三重大学医学賞が、また病院における診療技術において顕著な功績が認められた者に三重大学病院賞が授与されます。さらに今年度からは、この2つの賞に加え、臨床教育について顕著な功績が認められた者に三重大学教育賞が授

与されることになり、今年から病院の賞は合計で3つになりました。

本年度も各部署から多数の応募があり、選考委員による審査が行われました。厳正な審査の結果、本年度の三重大学医学賞は三重大学医学部附属病院消化管外科准教授の間山裕二先生に、三重大学病院賞は三重大学附属病院放射線科助教の高田彰憲先生に、また三重大学病院教育賞は三重大学医学部医学医療教育学准教授の櫻井洋至先生に授与されることになりました。3名の先生方におかれましては、これまでたゆまぬ努力とご功績を積み重ねられましたことに心より敬意を表します。今後ますますのご健勝とご活躍をお祈りいたします。

## 平成30年三重大学医学賞を受賞して

医学部附属病院 消化管外科 間 山 裕 二

昨年の三重大学医学部附属病院忘年会において、平成30年三重大学医学賞受賞式が行われました。本賞は平成29年10月以降に研究業績で顕著な功績が認められる医学部、医学系研究科及び附属

病院に勤務する大学教員に対して表彰されるもので、1年間に各教室から発表された論文数で評価されます。昨年度は消化管・小児外科から英語論文が40篇以上採用されており、その功績が評価さ

れ、消化管・小児外科を代表して受賞させていただきました。

当科は楠教授就任後より、消化器癌（食道癌、胃癌、大腸癌）、炎症性腸疾患ならびに小児疾患に対して、外科治療を含めた集学的治療を施行してきました。さらに治療から得られた臨床病理学的情報をデータベースとして構築し、臨床で思うクリニカルクエスチョンを検証することで多くの論文を発表してきました。症例報告を書くことは、1症例の経験が何倍にも増幅されるため、若い医師にとって理想的な学習手段であると考えています。また臨床論文の作成は、病態や治療法を学習したり、自らが行ってきた診療行為そのものを自戒するための格好の教材だと考えています。また分子生物学的アプローチからの基礎研究論文は大学として極めて重要であり、臨床に意義のあるトランスレーショナルリサーチに今後も力を注ぎたいと考えています。

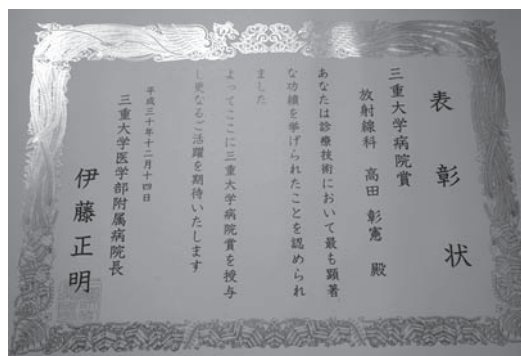
臨床と論文は決して二律背反ではなく、両者をこなしてこそ臨床が活力を生み、究極的には一人一人の患者さんの利益に繋がると考えています。この賞を励みに、外科医らしい臨床にfeedbackできるようなさらに質の高い研究を遂行するために、今後もますます精進してまいります。

最後に、このような栄誉ある賞をいただいたのは、ひとえに楠教授をはじめとする教室員皆様のお力添えがあってこそだと深く感謝しております。また共同研究機関であるアメリカのBaylor Medical CenterのAjay Goel教授、Michigan UniversityのJohn Carethers教授、そしてイギリスのGlasgow UniversityのDonald McMillan教授に深謝いたします。今後も三重大学医学部消化管・小児外科、そして三重大学医学部附属病院の発展に少しでも貢献できるよう努める所存ですのでご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

## 三重大学病院賞を受賞して

放射線科 高田 彰 憲

このたびは病院賞という大変光栄な賞をいただきありがとうございました。三重大学放射線科治療部門では年間約600名の患者さんの治療を行っています。放射線治療方法には通常の3次元照射に加え、定位放射線治療（SBRT）や強度変調放射線治療（IMRT）などの高精度治療があります。IMRTは癌の形状に合わせて照射可能となる最先端の照射技術になります。この方法は通常照射と比較して正常組織への線量を抑える事が可能となり、有害事象の軽減が期待されます。頭頸部癌では唾液腺への線量を下げ、口腔内乾燥を予防する事、前立腺癌では膀胱や直腸障害の予防につながる事が知られています。IMRTを実施するには通



常照射よりも多くの労力を要するため診療報酬も高めに設定されており、当科の診療実績が向上した理由として、このような高精度放射線治療の割合が増えた為と解釈しています。IMRTは副作用の軽減につながり、患者さんには非常に大きなメ

リットがある一方で、治療計画や検証などで治療の準備に2週間ほど要し、また日々の照射も通常照射に比べ時間と手間がかかる為、限られた症例にしか施行できません。当科では医師、技師、看護師がチームとなりIMRTの比率を増やしていく努力をしてきました。様々な工夫により、今年のIMRT施行比率は前年の17%から24%に向上しています。大学病院の特徴として進行頭頸部癌や小児癌、悪性脳腫瘍など、IMRTを行う事でメリッ

トがある症例が多くいます。このような症例に対して積極的に治療介入していく必要があります。また最近では肺癌に対するIMRTによって放射線性肺臓炎の発症が軽減される事が報告されました。食道癌でも心臓障害軽減につながる可能性があります。今後さらにIMRTの比率が増える事が予想されますが、放射線科治療部門スタッフ一丸となり、取り組んでいきたいと考えています。

## 三重大学病院教育賞を受賞して

医療教育学・肝胆膵移植外科 櫻井洋至

この度は過分なご評価をいただきこのように身に余る賞をいただくことができまして、大変嬉しく思っております。もとより私が個人でできたことなど何一つなく、病院中、医学部中の先生方のご指導をいただきながら、様々な案件を先生方にお願ひし、病院中の教育や指導に当たる先生方、スタッフの皆様が快くお引き受けいただき、日頃の現場での医療者教育に汗をかいていただいているからに他ありません。改めて深く感謝申し上げます。

助成金につきましては、教育・支援の趣旨を損なうことのないよう使い途を相談しているところでございます。

この場を借りて、宣伝させていただきたいと思っております。平成31年度のMMC・三重大学合同の臨床研修指導医講習会ですが、平成31年6月22-23日(土・日)、10月11-12日(金・土)を予定しております。今年度第2回は働き方改革の観点より平日を含めて少しでも受講される先生方の休日を損なわないように金土の開催となりました。その分お仕事の方の負担が出てしまいますが、何卒業務の調整をしていただき、多数ご参加いただけ

ましたら幸いです。

本講習会は医師法第16条の2に定められる医師の臨床研修に関する法律に基づき開催され、研修医の医療行為を指導するために必要な資格で全ての医師に受講が求められているものでございます。また内科専門医などいくつかの専門医資格の更新に必要な資格となりますので、卒後7年以上のご経験をお持ちの先生方におかれましてはぜひご予定を確認いただき、ご参加いただきたいと思います。

また指導医講習会のプログラムの中で、「医療安全：研修医と指導医のための医療安全・医療者としての自身を守るために」(医療安全管理部教授 兼児敏浩先生)と「専門医としての人間性、社会性向上に資する講習：コミュニケーションとチームビルディング演習-研修医、学生教育における指導医のあり方-医師患者関係の教育法」(ANAビジネスソリューション 新開千恵先生)の二つの特別講演につきましては、日本専門医機構の専門医共通講習(合計2単位)としての登録作業を行っております。お忙しい中丸2日間、合計18時間もの講習会に参加される先生方にとり、

少しでもメリットを感じていただける企画を準備しております。事前登録制となりますが講習会参加者以外の医師の方にもご参加いただけるようにさせていただきます予定です。さらにMMCでは飲食

代を除き平成23年度より病院長、三重県の支援をいただき受講費を無償化しております。

今後ともよろしくご指導のほどお願い申し上げます。

## 医学部長表彰を受けて

医学部女子バレーボール部主将 医学科4年 泉岡 希



この度、三重大学医学部女子バレーボール部は、昨年8月14日から16日にかけて行われました第70回西日本医科学学生総合体育大会バレーボール競技で優勝し、西医体3連覇を成し遂げることができました。そして、光栄にも医学部長表彰をいただきました。

私たち女子バレーボール部は、現在部員23名で活動しております。週3回の第二体育館での練習に加え、土日には練習試合や大会へ出場しています。部員の層は、小学生でバレーを始めた経験者から、大学で新たにバレーを始めた初心者まで様々です。専属の指導者やコーチがいない中で、有志で来ていただいている外部コーチに指導していただいたり、部員同士で指導し合ったりしながら、日々練習に取り組んでいます。

西医体3連覇という成績は、幹部が終わった後

もチームのために6年生まで続けてくださった先輩や、体に不調を抱えながらもコートに立ち続けてくれた先輩、そして、厳しい練習ではありましたが文句も言わずに付いてきてくれた同学および後輩、全部員が一丸となって掴み取った栄光です。決勝戦、24-22で迎えた第2セット。西医体3連覇がかかった運命の25点目を決めたのは、今回の西医体で引退することが決まっていた6年生の先輩でした。3連覇が決まった瞬間は全員がコート上で抱き合い、喜びを分かち合いました。また、今大会は第70回という記念すべき大会ということで個人賞が設けられ、ありがたいことに本学からは3人の受賞者が出ました。

今回、医学部長表彰をいただき、筆舌に尽くしがたい思いでおります。この表彰は、共に練習に励み、喜びも苦しみも分かち合える仲間、そして、何といても部活を支えてくださっている整形外科の濱藤啓広教授や、乳腺外科の小川朋子教授





をはじめとするたくさんのOBOGの先生、先輩方の支えがあってこそのものであります。部員を代表し、この場をお借りして深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

西医体3連覇というのは以前にも成し遂げられたことがあります、西医体4連覇というのは未

だにどの大学も成し遂げたことのない偉業です。その偉業を初めて達成するチームが私たちとなりますよう、日々の練習に励んで参りたいと思います。今後とも、我々三重大学医学部女子バレーボール部にご支援ご指導の程よろしく願いいたします。

#### 医学部卓球部女子主将 医学科4年 井上れみ



この度、医学部卓球部女子は、第70回西日本医科学生総合体育大会において優勝し、医学部長表彰を受けさせていただきました。名誉ある表彰を

受けることができ、部員一同光栄に思います。今大会において女子団体では西医体9連覇を達成いたしました。数十年に一度の三重大学主管の西医体で優勝できたことをとても誇らしく思います。部員、ご支援してくださったOBの皆様をはじめ、応援してくださった皆様に心より感謝申し上げます。

卓球部員は、現在73名在籍し、悲願の十連覇を達成するべく、日々練習に励んでおります。これからも切磋琢磨しあってさらに発展していけるよう、努力してまいります。

#### 医学部卓球部女子 医学科4年 沢 恵美加

この度、私は、西医体女子ダブルスの部で優勝し、このような素晴らしい賞を頂けたことを光栄に思います。

このような結果が残せたのは、頼りがいのある相方、いつも練習につきあってくださる先輩方、同級生、後輩たち、たくさん応援してくれた部員や他部活の方々、いつも支援してくださるOBの先生方、本当に沢山の人の支えがあって成し遂げられたことだと思います。この場をお借りして感謝申し上げます。また、今回は大規模な大会の運営ということもあり、大変なことが予想されましたが、運営を頑張り、試合に集中させてくれた部



員の皆様にはとても感謝しています。ありがとうございました。

これからもこの結果に続けますよう努力していきますのでよろしくお願いいたします。

医学部卓球部女子 医学科3年 嶋田 有利子

私は、昨年8月に行われた西日本医科学生体育大会におきまして、女子個人戦ダブルス・シングルの各種目で優勝し、医学部長賞を拝受することになりました。三重県で開催された本大会で、このような素晴らしい賞をいただく機会を得られたことを、大変光栄に思います。

三重大学医学部卓球部女子は、現在、西医体の団体戦で9連覇をしております。入部当初から、この連覇を繋いでいくことと、団体戦と個人戦の3種目全てで優勝することは、私の目標でありました。三重県開催ということもありまして、団体戦・個人戦ともに多くの方が応援に駆けつけてくださり、大変心強かったことをよく覚えています。応援を始め、多方面で関係者の皆様に助けていた

できました。いつもご指導くださる先輩方、支えてくれる同級生と後輩達、沢山の支援をくださいますOBの皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

団体戦・個人戦ともに連覇を目標に、今後も練習に励んでいきたいと思っております。また、団体戦の連覇を長く繋いでいくため、後輩への指導にも努めて参ります。



医学部陸上競技部副キャプテン 医学科4年 内山 耀



昨年8月に伊勢市で開催されました第70回西日本医科学生総合体育大会陸上競技部門において、トラック部門優勝・フィールド部門優勝の完全優勝で女子総合3連覇を果たし、光栄にも医学部長表彰をいただくことができました。記念すべき第70回大会が三重大学医学部の主管で地元開催となり、多くのOB・OGの皆様の前で3連覇を成し

遂げられたことは、部員一同この上ない喜びでした。

これもひとえに日頃から応援して下さる顧問の竹内万彦先生、OB・OGの皆様のおかげです。また、三医会の皆様の暖かいご支援と励ましがあつてのことだと思っております。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

今年度から医学部陸上競技部は、岸和田昌之先生を新しく顧問にお迎えする運びとなりました。岸和田先生のご指導の下、今後も三重大学医学部陸上部は、医学と陸上の文武両道を目指し日々努力を続けてまいります。



医学部空手道部主将 医学科4年 瀬古彩音



この度は昨年夏に行われました第70回西日本医科学生総合体育大会（西医体）空手道部門において女子組手団体戦で優勝し、医学部長表彰をいただくこととなりました。

今年で創部10年目の三重大大学医学部空手道部にとって、昨年の西医体は初めての大会主管となりました。初めてのことに戸惑いながらも約1年間をかけて準備を行い、他大学の空手道部の皆様やOB・OGの皆様の協力もあり無事に大会を終えることができました。男女ともに団体戦メンバーの多くが主管としての仕事を行いながらの大会出場でしたが、日頃の練習の成果を発揮できたことを大変嬉しく思っております。

西医体期間中においては、試合中以外は常に運営について考えているような精神的にも体力的にも今までで一番辛い大会でした。しかし部員全員

が協力して一つの大会をつくり上げるという貴重な経験ができ、部活としての団結力も強まったのではないかと感じています。

西医体での女子組手団体戦優勝は2年ぶり2回目でした。6年前に初の女子部員が入部し、徐々に部活全体が大きくなり今では女子部員が男子部員の人数をも超えるようになりました。その中で西医体においても男女ともに好成績を残すことができるようになりつつあります。ここ数年は団体戦の好成績のみならず、個人戦においても毎年入賞者が出ております。これらは短い練習時間の中、恵まれた環境で実力のある部員とともに真面目な練習を積み重ねた成果だと考えております。

空手道部は歴史も浅く、他の部活に比べてご存知の方は多くはないと考えております。今回、医学部ニュースで空手道部を取り上げていただきとても光栄であるとともに、皆様に知っていただく機会を頂けて大変嬉しく思っております。今後も部活動にも勉強にも全力を尽くし、先輩方が創り繋げてくださった空手道部の伝統を守り大きな部活に育てていく所存です。医学部ニュースをお読みの皆様にも空手道部を温かく見守っていただけたら幸いです。これからも空手道部ならびに各部員を宜しくお願い致します。

医学部空手道部 医学科2年 山本りい子

西医体空手道個人戦形女子の部において優勝致しました2年山本りい子と申します。この度は医学部長賞を承り、誠に光栄に思います。

今回は三重大大学が主催ということもあり、組手団体戦女子の部も合わせ、ホームで優勝という成績を残せたことに喜びを感じています。指導して



下さった先輩やOBの方々や、応援に来て下さった先生やOB・OGの方々には深く感謝しています。

来年度も団体戦・個人戦共に良い結果を残せるよう日々精進していきたいです。

## 医学部剣道部女子



昨年8月に行われました西日本医科学生剣道大会（西医体）において女子団体優勝を果たし、この度、医学部長表彰を承ることができ大変光栄に思います。

医学部剣道部は創部から45周年を迎え、男女合わせて50名が所属しています。他大学の剣道部に比べて非常に部員数が多く、また過半数の部員が大学から剣道を始めているという珍しい部活です。

普段の稽古は幹部が中心となって練習メニューを考え、どうしたら試合で勝てるか、剣道が上達するかを先輩後輩関係なく意見を交わし、一人一人が力をつけられるよう努力してきました。

今回の西医体は三重大学が主管ということで、大会の開催にあたり多くの方々にご支援いただきながら、医学部剣道部一丸となって準備、運営を進めてきました。そのような特別な西医体において女子団体優勝という最高の成績をおさめることができたのは、ご支援頂いた多くの方々への恩返しとなる結果であり、また大会の運営にあたった剣道部全員の努力が報われる結果でもあったと思います。

大会に関わる全ての方々に感謝し、この経験を自信に変え、これからも医学部剣道部がますます発展していけるよう部員一同努力していきたいと思えます。

## 学会だより

### 2018年（第37回）日本癌学会奨励賞を受賞して

医学系研究科基礎医学系講座分子生理学分野 笠原 広介

2018年9月27～29日に大阪国際会議場・リーガロイヤルホテル大阪で開催された第77回日本癌学会学術総会において、日本癌学会奨励賞（基礎部門）を受賞いたしましたのでご報告します。本賞は、40歳未満の若手がん研究者を対象とした歴史ある賞であり、過去の受賞者からは著名な研究者

が多数輩出されております。栄誉ある賞を受賞できたことは大変光栄であるとともに、賞の名に恥じぬよう日々邁進していきたいと存じます。

受賞題目の「一次線毛の形成動態によるがん細胞増殖制御機構の解明」は、稲垣昌樹教授の指導のもと私たちが十年來取り組んできた研究テーマ

の一つです。私たちは、細胞増殖の新しい制御機構として、一次線毛と呼ばれる細胞小器官の形成が重要な役割を果たしていることを発見しました。その後、一次線毛の形成メカニズムを詳細に解析してきた結果、形成制御に関わるプロテアーゼ（タンパク質分解酵素）群が、ある種のがんにおける分子標的となる可能性を見つけ出しました。

今後、さらに解析を進め、がん基礎研究の発展及びがん治療法の開発へ貢献していきたいと思えます。

最後になりますが、研究開始から親身になって御指導いただいた稲垣昌樹教授に深く御礼申し上げます。

## International Confederation of Plastic Surgery Societies Award of Excellenceを受賞して

形成外科学 石 浦 良 平

この度、International Confederation of Plastic Surgery Societies (国際形成外科学会)より Award of Excellence (優秀賞) を授与されました。この賞は、国際形成外科学会に加盟する世界各国から毎年数カ国が選出され、その国の若手のうち将来の形成外科の発展への貢献が期待されるもの1名に授与を行うというものです。また、副賞として受賞者には500ユーロが贈呈されます。本年度は、ベルギー、ブルガリア、ドイツ、オランダ、ノルウェー、アイルランド、イスラエル、イタリア、日本、韓国、スペインが選出され日本枠として私が選出されました。

選出に至った理由は、私が行なっているラットモデルを用いたリンパ浮腫の研究のうち2017年に発表した” Comparison of Lymphovenous Shunt Methods in a Rat Model: Supermicrosurgical Lymphaticovenular Anastomosis versus Microsurgical Lymphaticovenous Implantation. (ラットモデルにおけるスーパーマイクロサージャリーの技術を用いたリンパ管細静脈吻合術とマイクロサージャリーの技術を用いたリンパ管静脈移植術の開存率の比較検討)” が評価されたことでした。

19世紀末、アレクシス・カレルにより始まった血管吻合という手技において、その成功の鍵となるのは内膜と内膜の連続性の形成であるということは、現在、世界共通の認識となっています。しかし、1960年代に始まったリンパ管静脈バイパス形成においては内膜の連続性の重要性を証明するものではありませんでした。そのため臨床ではリンパ管静脈バイパス形成において、スーパーマイクロサージャリーの技術を要するが内膜の連続性を形成するリンパ管細静脈吻合術とマイクロサージャリーの技術で行える静脈内にリンパ管を移植するリンパ管静脈移植術が同様の術式として世界的に行われているのが現状でした。今回の私の研究でリンパ管静脈バイパス形成においても内膜の連続性の形成がその開存率に影響を与えるということが動物実験により世界で初めて証明されました。これにより、臨床におけるリンパ浮腫の治療戦略が一歩進み、世界中でリンパ浮腫に苦しむ方をその苦しみから救うためにささやかな寄与できたかと考えています。

現在、ラットモデルを用いてリンパ節に焦点を置いた新たな実験を開始しております。引き続き、臨床と研究を両立し今後の形成外科の発展、引い

てはリンパ浮腫に苦しむ方の力になれるよう日々精進していきたいと思います。まだ研究は始まったばかりで悪戦苦闘しておりますが今後とも温かいご指導ご鞭撻のほどなにとぞよろしくお願いいたします。また、共同研究やアイデアの交換など何か些細なことでもありましたらご遠慮なくいつ

でもご連絡ください。

最後に、このような素晴らしい賞を受賞するにあたりご指導いただいた諸先輩方、同僚、そして、いつも私を励まし支えてくれる妻に深謝申し上げます。

## 「日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2018ベストプレゼンテーション賞」を受賞して

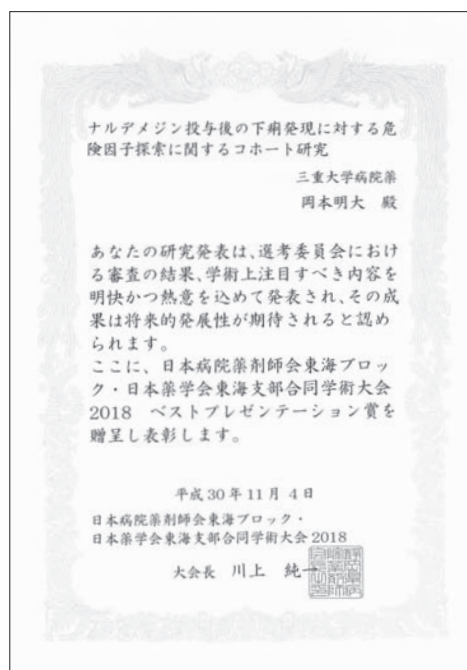
薬剤部 岡本明大

演題名：「ナルデメジン投与後の下痢発現に対する危険因子探索に関するコホート研究」

2018年11月4日（日）に静岡県立大学草薙キャンパスにて開催された、「日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会2018」において「ベストプレゼンテーション賞」をいただきました。

ナルデメジン（以下、NAL）は、2017年5月に販売開始された末梢性 $\mu$ オピオイド受容体拮抗薬であり、オピオイド誘発性便秘症の治療薬として、広く臨床使用されております。しかしながら、下痢の出現により投与継続が困難となる事例が散見されることから、情報が不足している下痢発症に関する危険因子を明らかにすることを目的とし、本研究を行いました。三重大学医学部附属病院（以下、当院）において入院時にNALが開始された患者を対象とし、下痢発現の危険因子について後方視的にカルテ調査を行なった結果、①麻薬投与量（モルヒネ換算）が120mg/day以上の患者割合、②NAL開始までの麻薬投与期間、③PPI・H<sub>2</sub>ブロッカー併用患者割合が下痢発現群では非発現群に比べ高値となる傾向が認められました。考察として、麻薬投与量が多いことや投与期

間が長くなることで、NAL投与による麻薬の身体依存に対する離脱症状が生じ、下痢を誘発する可能性が考えられました。また、PPIやH<sub>2</sub>ブロッカーは、薬剤自体がClostridium difficile関連下痢症の危険因子であることや薬剤関連下痢症のリスクを増加させることが知られており、NAL投与時の下痢の危険因子となる可能性があります。本研究の限界として、後方視的研究であり症例数が少ないことが挙げられ、今後さらに症例数を蓄積し、本研究で確認された傾向を検証する必要がある



ると考えております。

今年度より三重大学大学院医学系研究科博士課程に進学し、最初に取り組んだ研究が評価されたことは素直に嬉しく思いました。当院では社会人博士課程に進学する薬剤師はあまり多くはありませんが、後輩達に将来の選択肢の一つとして示し

ていくことができるよう、これからも業務・研究・教育に邁進していきたいと考えております。最後になりましたが、本研究を実施するにあたりご指導賜りました薬剤部 奥田真弘教授、岩本卓也准教授をはじめ、ご協力いただいた先生方にご場をお借りして厚く御礼申し上げます。

## 第50回国際小児がん学会を開催して

大学院医学系研究科医学医療教育学 堀 浩 樹

2018年11月16日（金）～19日（月）の4日間、国立京都国際会館にて国際小児がん学会（SIOP, International Society of Paediatric Oncology）が開催されました。20年ぶり2回目の日本開催にあたり、私も国内組織委員会事務局長として3年前から招致・開催決定後の準備、学会運営に取り組みました。

この学会には、小児がんの治療成績の向上を目指す世界90か国2,500名の小児がんの診療・研究・支援等に関わる医療者・研究者・支援者が参加しました。前回の日本開催では、三重大学小児科・櫻井 實先生がco-chairを務めており、本学にとってもゆかりのある学会です。

第50回という記念すべき本大会では、大隅良典・東京工業大学栄誉教授と本庶 佑京都大学特別教授という二人のノーバル賞受賞者の講演がありました。また、2018年9月に世界保健機関（WHO）が、Global Initiative for Childhood Cancer を公表し、2030年までに小児がんの生存率を60%にまで向上させる（現状では、欧米先進国では約80%、アジア・アフリカの低所得国では約20%）ための活動を開始してから初めての大会ということで、WHOでの担当官であるAndre Ilbawi氏や国際対がん連合（UICC, Union for International Cancer Control）会長

HRH Princess Dina Mired（ヨルダン王妃）の参加もありました。

開会式でのスーパーキッズ・オーケストラによる演奏では、小児がんの子どもを支えようと参加者全員による“You Raise Me Up”の合唱があり、会場が感動に包まれました。国内外の専門家による若手研究者向けの教育セッション、シンポジウム、基調講演に対しても参加者から高い評価があり、Network event（交流会）では小児がん支援グループによる日本らしいおもてなしに対して感嘆の声が寄せられました。

本学の学部学生、大学院生も運営ボランティアとして参加し、若い人達が世界トップレベルの研



開会式で司会を担当する筆者

究や地球規模の小児がん征圧活動に触れることが



大隅良典・東京工業大学栄誉教授の講演

できた学会になりました。



本庶 佑京都大学特別教授の講演

## 西日本医学生学術フォーラムを開催して

2018年12月15日に三重県医師会館（三重県津市）にて「西日本医学生学術フォーラム」を開催いたしました。本フォーラムは、自主的に研究活動を行う西日本各地の医学生が研究成果を発表し、大学間交流を深めることを目的として年一回開催されています。2013年に本学と奈良県立医科大学が中心となって立ち上げた「医学研究学生フォーラム」と、2014年から開催されている「中国四国地区医学生学術交流会」が、2016年に「西日本医学生学術フォーラム」として統合され、今回が第3回目の開催となります。

今回のフォーラムでは11大学（愛媛大学、大阪大学、大阪市立大学、岡山大学、関西医科大学、熊本大学、島根大学、徳島大学、奈良県立医科大学、山口大学、三重大学）から口頭発表10題、ポスター発表26題が発表されました。片山直之医学部長のご挨拶を頂いたのち、午前中に口頭発表、午後からポスター発表を行いました。どちらのセッションでも各演題に対して活発な議論が行われました。特にポスター発表では、会場横に休

### 基礎医学系講座 統合薬理学 西村有平

憩スペースを作ったのですが、そこで休憩する学生はほぼ皆無で、各ポスターの前で議論している姿が大変印象的でした。また、岡山大学薬理学の西堀正洋教授による特別講演も行われました。医学部学生の頃から現在に至るまでの西堀先生が歩まれた道のを率直に語っていただき、参加者の心に響くご講演でした。医学教育・研究を考える上で、学生だけでなく教員にとっても貴重なヒントが数多く含まれており、大変参考になりました。夕方には実行委員会（三重大学学生）による学生交流企画が開催され、イグノーベル賞のようなユニークな研究アイデアを8グループ（グループ内は各大学混成で5-6名）で競う中で、学生間交流を深めました。同時刻に教員代表者会議を開催し、本フォーラムをさらに発展させ、多くの研究医を養成するための方略について議論しました。また、2019年、2020年の西日本医学生学術フォーラムはそれぞれ大阪大学、愛媛大学が担当することを決定しました。夜には、井村正史三医会会長のご挨拶を頂き、参加者全員による投票で選ばれ



た優秀発表者に対する表彰式を行いました。最優秀賞を受賞した学生さんが「自分の研究は未完成な部分が多く、大学に帰って早く研究の続きをしたい」と受賞後のスピーチをしていたことが印象的でした。その後、情報交換会を開催し、学生・教員間の交流をさらに深めることができました。別れを惜しみつつ、夜7時過ぎに閉会となりました。

西日本医学生学術フォーラムの大きな特徴は、年會を担当する大学の学生が主体となって企画・運営を行うことです。今回のフォーラム実行委員となった本学の学生（写真）は、色々な場面で迅速かつ適切に行動しており、多くの参加者の皆様からお褒めの言葉をいただきました。本学医学部の皆様の温かいご支援により、このような実りあ

るフォーラムを開催することができました。心より感謝申し上げます。この成果を今後の医学教育・研究の発展に活用できるよう努力して参ります。今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。



「西日本医学生学術フォーラム2018実行委員」の皆さんです。前列左より、岡部、宮尾、弓削、佐藤、多田、後列左より、鈴木、柴田、柿本、宇都宮、加藤、芦川。

## 「第34回NPO法人日本脳神経血管内治療学会学術総会poster賞金賞」 を受賞して

血管ハートセンター 三浦洋一

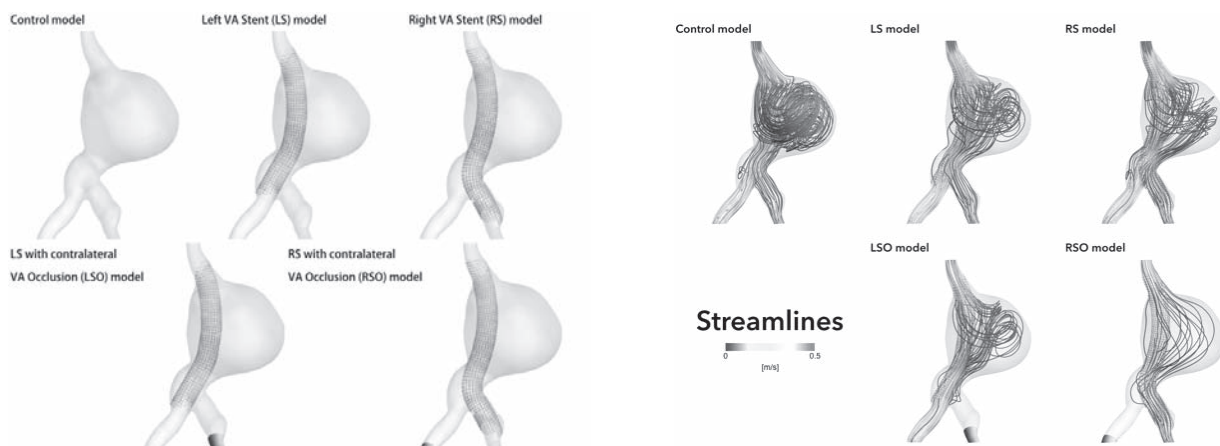


2018年11月22日（木）～24日（土）に仙台国際センターで開催された第34回NPO法人日本脳神経血管内治療学会学術総会にて“CFDを用いた血行力学に基づく脳底動脈紡錘状動脈瘤の血管内治療戦略”という演題で発表させて頂き、poster賞金賞をいただきました。

CFD(数値流体力学, computational fluid dynamics)とは、流体の運動に関する方程式をコンピュータで解くことで流れを観察するシミュレーションの方法のことで、現在でも治療困難である大型の脳底動脈紡錘状動脈瘤に対して血管内治療を行う際の治療方法を決定する目的で活用しました。近年のコンピュータ技術の発達に伴い、10年以上前から三重中央医療センターの石田藤麿先生を中心に当教室でもCFDを活用した研究を行っており、

これまでに脳動脈瘤の破裂状態（破裂動脈瘤と未破裂脳動脈瘤の流体力学的特徴の違い）、破裂動脈瘤における破裂点の予測や止血機序、動脈瘤壁の性状など脳血管障害を中心に様々な研究を行ってきました。今回の発表はケースレポートではありませんでしたが、今後のCFD技術の発展への期待も込めて評価いただいたのではないかと考えています。

今回の発表には、鈴木秀謙教授や当麻直樹先生、石田藤磨先生の他、様々な先生方にご指導・ご協力をいただいております。この場をお借りして御礼申し上げます。今後も現状に満足することなく研鑽を積んでいければと思います。引き続き、皆様のご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



## 「第34回NPO法人日本脳神経血管内治療学会学術総会

### JNET論文賞金賞」を受賞して

脳神経外科学 当麻直樹

日本脳神経血管内治療学会の学会誌である Journal of Neuroendovascular Therapy (JNET) に掲載された「A study of the relationship between the microcatheter shape and stability by numerical simulation (JNET 2017 : 11 ; 333 - 340)」が本学会の学術総会の論文賞を受賞しました。

脳神経領域における血管内治療の分野は、テクノロジーの進歩とともに発展し続けており、次々と新たな治療デバイスが導入され、新たな治療が可能となってきています。

実は日本脳神経血管内治療学会の学会賞を受賞するのは2005年、2013年に続き3回目となります。

いずれも脳動脈瘤のコイル塞栓術に関する論文で、過去の論文はコイルの改良によりいかに塞栓効果を高め再発を防ぐかということがテーマでした。

その後の血管内治療のデバイス開発の趨勢は、コイルの改良よりもステントなどの新規デバイスへと変化し、治療適応が拡大するとともに治療効果も高まってきていますが、このように進歩し続ける時代であるからこそ忘れてはならないのが基本手技です。

現在でも脳動脈瘤の血管内治療の基本は、動脈瘤内に安全にマイクロカテーテルを誘導して、確実にコイルを動脈瘤に充填することです。しかし、その手技の習得はそんなに簡単ではありません。

基本技術の技術伝承にはその手技の理論を言語化してわかりやすくすることが必要と考え、カテーテルの挙動と血管壁にかかる力などを山口大学森先生、九州工業大学 高嶋先生というふたりの工学者とともに研究してきました。今回の論文は本研究プロジェクトから初めての論文で、マイク

ロカテーテルの先端形状と動脈瘤内での安定性についての解析結果を報告しました（おふたりに大変感謝しております）。

本研究の成果が安全確実な脳動脈瘤の血管内治療に繋がることを期待して、今後もこのプロジェクトを継続していきたいと考えております。

## 第37回The Mt. Fuji Workshop on CVD HS賞を受賞して

大学院医学系研究科 脳神経外科学 金丸 英樹

2018年8月25日に名古屋で開催されました第37回The Mt. Fuji Workshop on CVDにおいて、「炎症性バイオマーカーであるペリオスチンとくも膜下出血における遅発性脳虚血との関連」について口演を行い最優秀シンポジスト（HS賞）に選出されましたので報告致します。

本会は脳血管障害の研究をテーマに、1982年より毎年開催されている由緒ある学会であり多くの脳卒中に関わる医師が参加されています。

本演題では、三重大学 脳神経外科と関連施設で実施したくも膜下出血前向き登録研究（pSEED study）に登録された症例を対象に臨床経過（特に遅発性脳虚血の発生）と血漿中ペリオスチン濃度との関連について検討し報告しました。

動脈瘤破裂により生じるくも膜下出血は、約4割程度の症例で死亡を含む転帰不良となりうる疾患です。転帰不良となる原因として、動脈瘤の再破裂、遅発性脳虚血が重要であり、前者に対しては開頭術や血管内治療が実施されていますが、後者については確立した治療法はなくその発生のメカニズムや予測、治療に関する様々な研究が行われています。

本検討でテーマとしました細胞外マトリックス蛋白の一つであるペリオスチンですが、悪性腫瘍や心筋虚血、アレルギー性疾患などで報告されて

おり組織損傷や炎症に伴って発現するとされています。くも膜下出血では動脈瘤破裂に伴い脳損傷が生じますが、ペリオスチンの何らかの関与があるとの仮説を立て検討を行いました。

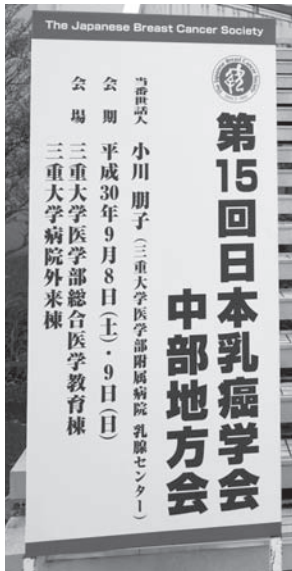
結果として、髄液ドレナージを実施した症例では血漿中ペリオスチン濃度がより低いこと、発症早期の血漿中ペリオスチン濃度がより高いことが遅発性脳虚血発生の独立した危険因子であることが分かりました。このことからペリオスチンがくも膜下出血での脳損傷を反映して増加し、遅発性の神経脱落症状出現に寄与している可能性があるとして報告致しました。

本検討は臨床情報及び血液検体収集にご協力頂きました患者さん、各施設の担当医師、当教室内でELISA kitを用いてペリオスチン濃度を測定した際手伝ってくれた研究室実習生の皆さんなど、多くの方のおかげで実施することができました。これらの皆様方および、直接ご指導頂きました当教室鈴木秀謙教授にもこの場を借りて御礼申し上げます。

くも膜下出血は我々脳神経外科医にとって大変重要な疾患であると同時に興味深い研究テーマでもあります。現在くも膜下出血における脳損傷について、ペリオスチンに着目した基礎実験も行っており、今後も研究を続けたいと考えています。

## 「第15回日本乳癌学会中部地方会」を開催して

乳腺センター 小川 朋子



2018年9月9日(土)・10日(日)に、三重大学医学部総合医学研究棟(臨床講義棟)および三重大学病院にて第15回日本乳癌学会中部地方会を開催いたしました。三重県での乳癌学会中部地方会開催は2006年以来となり、また、大学での開催は中部地方会では初めてで

はありましたが、三重大学の新しい病院建設・移転が3月で終了し、広い駐車場もできたことから、公共機関・車のどちらでもアクセスしやすい施設となりましたので、開催会場といたしました。

今回の中部地方会は、日常診療に直結した症例を検討したり、乳癌診療の様々な領域について学べるような会にしたいと考え、テーマを「明日につなげる乳癌診療」としました。公募による一般演題や共催セミナー、日本乳癌学会主催の教育セミナーに加え、看護セミナー(リンパ浮腫の手術療法と術後ケア、乳房再建)・薬剤師セミナー(薬物療法と妊孕性)・技師セミナー(マンモグラフィ、超音波検査)などを企画しましたが、さまざまな職種の方が参加し、部門・職種を超えた学びの場になることを期待し、名称は全て企画セミナーとして開催しました。さらに、チーム医療で取り組む遺伝性乳がん卵巣がん症候群や

Advance Care Planningなどの企画セミナー、局所治療をテーマとした症例検討、ハンズオン(超音波ガイド下インターベンション、真皮縫合)やエコー読影コーナー・手術ビデオコーナーなども企画いたしました。また、お弁当は東洋軒、生月、入栄軒、三谷のうなぎ、高虎ドッグ、休憩コーナーには赤福やおにぎりせんべいなど、三重の名物を揃え、楽しく学んでもらえる地方会を目指しました。

私を含め当科が学会運営に不慣れなため、三重大学肝胆膵・移植外科の伊佐地先生、岸和田先生、種村先生にも学会運営に加わっていただき、また、三重大学、三重県下で乳癌診療に関わってもらっている多くの方々に協力してもらったおかげで、学会はスムーズに進行し、400名以上の方に参加していただき、盛会裏に会を終えることができました。非常に多くの方にご協力いただき、無事、開催できたこと、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。



## 「第55回小児外科学会優秀演題発表賞」を受賞して

消化管・小児外科学講座 周産母子センター助教 小池 勇 樹

平成30年5月30日～6月1日にかけて新潟で開催された第55回小児外科学会において、「虚血再灌流による腸管障害モデルラットに対する羊水中幹細胞の有効性についての検討」の演題で、小児外科研究部門における優秀演題発表賞を受賞致しましたのでご報告申し上げます。新潟での学会開催ということもあり、副賞として新潟産コシヒカリ1kgを頂きました。私は、2015年4月～2017年3月までトロント大学のThe Hospital for Sick Children通称Sickkidsにおいて、Agostino Pierro教授の元で2年間研究留学をしておりましたが、今回の発表内容はその留学期間中における研究内容のうちの一つになります。

これまでに羊水中幹細胞（Amniotic fluid stem cells）は、壊死性腸炎モデルマウスに対して治療効果があることが報告されておりましたが、今回、中腸軸捻転（短腸症候群に陥る原因の一つ）などの腸管血流障害（虚血再灌流）における羊水中幹細胞の治療効果を検討した初めての研究になります。若年ラットを用いて上腸間膜動脈を1時間クランプすることで虚血再灌流による腸管障害モデ

ルを作成し、再灌流後に羊水中幹細胞を尾静注することで、①羊水中幹細胞は48時間後にAFS cellは傷害腸管に到達していること ②組織傷害レベルの改善 ③炎症反応の改善 これらがみられることを実験的に証明しました。しかし、腸捻転や腸重積などの虚血再灌流に伴う腸管障害は、いずれも緊急や準緊急疾患の状況下であるため、幹細胞そのものによる治療は時間的にも倫理的にも実現困難です。そのため、現在は羊水中幹細胞が治療効果を発揮するメカニズム（羊水中幹細胞が傷害腸管においてTumor necrosis factor-stimulated gene 6 protein：TSG-6を放出し、抗炎症作用を惹起する）を同定し、研究を継続中です。

このような賞を頂くことができたのは、楠正人教授、内田恵一病院教授をはじめ教室員の皆様、さらに三重大学殿のお力添えがあってこそだと深く感謝しております。今後も、三重大学消化管・小児外科と三重県内の小児医療の発展に貢献できるよう、善処させて頂く所存ですので、ご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

## JSS Young Research Awardを受賞して

消化管・小児外科学講座 医学・看護学教育センター助教 奥川 喜 永

このたび日本外科学会より、外科領域全般において将来的な活躍が期待される40歳以下の若手医師を対象としたJSS Young Research Awardという名誉ある賞を受賞することができ、2018年4月に東京で開催された第118回日本外科学会総会に

て授与式に参加させていただきましたのでご報告いたします。

私はこれまで消化管悪性腫瘍が遠隔転移にいたるメカニズムの解析とその診断／予後マーカーの発見を中心に研究をすすめてきた経緯があり、大

学院生時代は担癌宿主相互作用によるサイトカインシグナル伝達や血液を用いたバイオマーカーの研究しておりました。その後は三重大学で得られた研究成果をさらに発展させるため、アメリカのテキサス・ダラスにあるBaylor Medical Centerに留学し、Epigenetics、とりわけnon-coding RNA (ncRNA) の癌進展における機能解析、さらに血液や組織を用いた診断／予後マーカーとしての意義に関する研究を続け、多くの先輩・後輩・同僚・家族の支えにより、幸いにもいくつかの成果を報告することができました。今回の受賞は、これまでの業績をもとに、あらたな研究計画として消化管に対する癌分泌型エキソソーム特異的蛋白の同定と、それを用いたエキソソーム包埋遺伝子情報の網羅的解析を申請し、受賞いたしました。

このような榮譽ある賞をいただける場に立つことができたのは、ひとえに三重大学消化管・小児外科、楠正人教授、荒木俊光准教授、内田恵一病院教授、問山裕二准教授をはじめ教室員皆様のお力添えがあってこそだと深く感謝しております。またアメリカ留学を許可していただいた三重大学殿、研究の機会を与え指導していただいたBaylor Medical CenterのProfessor. Richard Clement BolandとProfessor. Ajay Goel、そして留学後も支えてくれた家族にこの場をお借りし、深謝いたします。今後も、三重大学消化管・小児外科と、そして三重大学病院の発展に少しでも貢献できるよう、患者様のもとに届く腫瘍学研究を目標に頑張っていく所存ですのでご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願ひ申し上げます。

## 第26回三重県胎児・新生児研究会を主催して

三重大学医学部附属病院 小児外科 内田 恵 一

平成30年7月29日（日）に、アスト津アストホールにて、第26回三重県胎児・新生児研究会を主催いたしました。本研究会は、胎児・新生児の治療やケアに携わっている看護師、助産師、小児内科医、産婦人科医、そして、外科系医師（脳外科医、心臓外科医、小児外科医）などが集まり、三重県における胎児・新生児学の進歩、発展を図り、周産期医療の向上に貢献することを目的とし、年1回研究会を開催しています。

一般演題は17演題のご発表で、大変興味深い症例報告や素晴らしい取り組みを数々ご報告いただき、県内の周産期医療のレベルの高さを改めて実感いたしました。特別講演では、筑波大学小児外科教授の増本幸二先生をお招きし「短腸症候群の基礎と栄養管理」という話題でご講演していただきました。短腸症候群のみでなく低出生体重児の

栄養管理においても重要な、脂肪製剤やビタミン、セレンや亜鉛などの微量元素に関して、基礎からトピックスまでエキスパートから大変わかりやすいご講演でありました。

本会の開催に関しましてご協力いただいた、三重県胎児・新生児研究会事務局である国立病院機構三重中央医療センター臨床研究部の益野元紀先生はじめスタッフの皆様、そして、三重大学大学院消化管・小児外科学教室の楠正人教授、並びに、第26回研究会事務局の井上幹大先生はじめ小児外科グループのスタッフ一同に感謝いたします。



## 第21回日本救急医学会中部地方会 総会・学術集会

医学部附属病院 救命救急・総合集中治療センター 講師 石倉 健

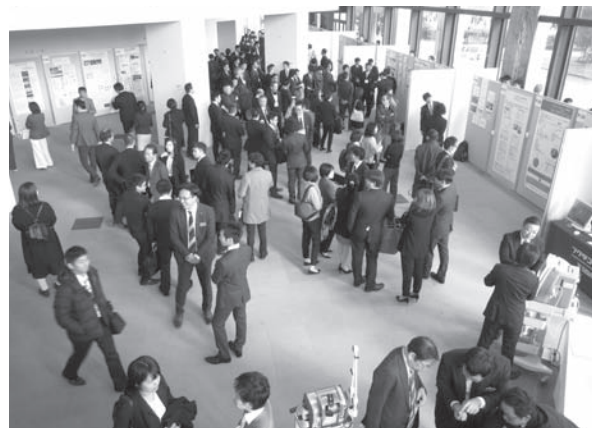


2018年12月8日、平成最後の救急医学会の中部地方会を、今井教授就任後初めての救急医学会地方会として開催いたしました。開催が決定したときには、医局員が少ないことからコンパクト学会を目指していましたが、開催前年の理事会で今までされたこともない多数の要望が出され、事務局長として凍り付いたのを今でも昨日のように思い出されます。

次々押し寄せる三次救急患者に対応してくれる医局員に負担をかけないように、コアメンバーを少人数にして対応しました。地方会では初めての専門医講習や共通講習、併設する研究会、看護師プログラム、そして目玉となる吉田沙保里さんを招いての市民公開講座などでプログラム作成は難航しましたが、なんとかすべて盛り込むことができました。さらには学会の前日と翌日

に、各種ビジネスミーティング・勉強会や新しい標準化プログラムの開催もできました。心配された予算も、今井教授の先輩方や救急関連病院を中心とした多くのご協力をいただいで無事に赤字を免れました。そして何よりも大変だった学会当日の運営は、津市消防本部、そして三重県内の消防機関から多数の協力をいただき、無事に乗り切ることができました。学会当日は600人以上の参加者にお越しいただき、盛会に終わることができました。今井教授はじめ医局員全員がほっと胸をなで下ろしたところです。

学会が終わった後も救命救急医療に必死に追われる日々が続き、この学会のことはるか昔のことのように感じます。次々に行われる新しい救命救急医療や研究で必死ですが、地域医療を守りながら少しでも世界に発信していけるように教室全員で頑張っていきたいと思います。来年には日本集中治療学会 中部地方会の主幹をします。今回の経験を元に、さらに魅力ある学会にできるよう、努力していきたいと思います。



## 第18回日本内分泌学会東海支部学術集会を開催して

医学部附属病院糖尿病・内分泌内科 矢野 裕



写真① 学会ポスター

平成30年10月14日に、津の三重県総合文化センターで第18回日本内分泌学会東海支部学術集会を開催しました。この会は、東海地方の内分泌領域のエキスパートの先生方に集まっていただき、内分泌に関連した症例に対して意見交換をする会でもあります。下垂体、甲状腺、副甲状腺、副腎、膵臓（糖尿病も含みます）に関連する内分泌疾患の中で診断、治療が難しい症例に関して活発な討論が行われました。また、ランチョンセミナー

では、糖尿病の最先端の治療について2つのセミナーが行われました。特別講演としては、JES We can Tokai から推薦された演者により、免疫チェックポイント阻害薬による下垂体機能低下症、甲状腺機能異常症の特徴と発症機構についてご講演いただきました。JES We Canとは、Japan Endocrine Society Women Endocrinologists Associationの頭文字からの造語で、男女共同参画推進委員会と表現されています。内分泌学会の女性会員の比率は全体では31.1%ですが、20歳代は49.3%、30歳代は47.2%でほぼ半数に達しており、JES We Canは、女性研究者に対して出産・育児・介護と研究を両立するための環境整備を行う取組に対して、支援を行うことを大きな目標としております。

症例検討、ランチョンセミナー、特別講演、糖尿病関連の展示といずれも充実した内容であり、症例への着眼点や、診断、治療に関する最新の情報等、多くの事を学ぶことのできる良い機会であったと思います。午前中から始まった本会ですが、講演、討論を聞き入っているうちに飛ぶように時間が過ぎ、気が付くと夕方の終了間近になってお



写真② 大会長あいさつ



写真③ 特別講演



りました。三重県での内分泌関係の学会は今回が初めてであり、会の運営、参加者の人数等心配しておりましたが、多数の参加者があり、特に若手の先生方には内分泌学の面白さに十分触れていただいたと思います。内分泌は複雑で難しいとのイメージがありますが、各症例についてホルモンの作用機序を考えながら病態を解析し、的確な診断ができれば、治療により患者さんの状態を劇的に改善することが可能であり、QOLと予後を大きく変えることができます。従って、患者さんに対する貢献度は非常に大きく、臨床面でも研究面でもやりがいのある分野だと思えます。

更に今回は、障害者の方を支援しているカフェ・レストランをお願いして、ランチョンセミナーのお弁当を作っていただきました。三重の食材をふんだんに取り入れていただき、参加者の方々に楽しんでいただいたのではないかと思います。

当科の医局員の先生方をはじめとして、多くの先生方、関連するスタッフの方々に多大なる御協力をいただき、無事盛会に終わることができました。この場をお借りして御礼を申し上げますとともに、これを機会に、三重県における内分泌の臨床と研究が更に発展していければと思います。

## 学位記授与式

平成30年12月19日（水）事務局2階大会議室で大学院学位授与式が挙行され、駒田学長から6名の方々に三重大学博士（医学）の称号が授与されました。

平成31年3月25日（月）三翠ホール（講堂）で大学院学位授与式が挙行され、駒田学長から7名の方々に三重大学修士（医科学）、11名の方々に三重大学修士（看護学）、25名の方々に三重大学博士（医学）、1名の方に三重大学博士（看護学）の称号が授与されました。



## 三重大学医学部の理念

### Mission and Core Principles of Mie University Faculty of Medicine

確固たる使命感と倫理観をもつ医療人を育成し、豊かな創造力と研究能力を養い、人類の健康と福祉の向上につとめ、地域および国際社会に貢献する。

Mie University, School of Medicine aims to raise medical personnel with a steadfast sense of mission and ethical view, and to cultivate in it students and faculties both rich creativity and research capacity.

The school will strive for development of human health and welfare and contribute to regional and international society.

## 編集後記

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。

医学科や看護学科への入学は、ほぼ100%で医師か看護師になるという道しかなくなります。何をいまさらと思うかもしれませんが、どちらの道でも知識と修得すべきことは膨大にあります。入学した今こそ、医療のプロフェッショナルになるために必要なことを考えてみてください。大学に入れて、いろいろしたいことがあると思いますし、大学時代しかできないことは確かにたくさんあります。1日が24時間だと誰が決めたんだと思うこともあるでしょう。でも、1日は24時間しかありません。睡眠時間を削らず、1日24時間を計画的に使って健康的な大学生活を過ごし、自分の志した医療のプロフェッショナルになれるように頑張ってください。医学部の教員および職員もその志の達成には協力を惜しみません。

四月は人が入れ替わる季節でもあります。去られる先生方、お疲れさまでした。これからはますますのご活躍を心からお祈りしています。また、先生方が残されたご功績に敬意を表するとともに、ますます発展させることを誓います。新たに就任された先生にもご紹介・ご挨拶をいただきました。ありがとうございます。

前号で紹介のあった、西医体での競技に優勝した団体・個人に対する医学部長表彰を受けた学生からも寄稿をいただきました。今年は主管をしながらの競技で大変だったと思います。おめでとうございます。そのほか、今号でもたくさんの学内・外での受賞についても寄稿をいただいております。いろいろな分野での受賞であり、それぞれさらなるご活躍を期待しています。

最後に私事になりますが、私も今年度末で定年となります。出口先生から医学部ニュース編集委員長を引き継ぎ20年になります。実はその前の助教時代から委員をしていましたので、25年ぐらい編集委員をしています。今年2回の発行ですので、ニュースというよりは医学部であったことを記録に残すことを主眼に置いてやってきました。お忙しい中、編集委員会に参加いただいた歴代の委員の方、業務量が増えていくにも拘らずニュースの発行に時間を割いていただいた事務職員の方、また寄稿をいただいた多くの方々と数多くの読者の人々に感謝申し上げます。もう一号発行しますが、早めの退任の挨拶とさせていただきます。

編集委員長 吉田利通

### 編集委員

吉田 利通 楠 正人 丸山 一男  
西村 有平 内田 恵一 福録 恵子  
山崎 晴夫

### 編集発行

三重大学 医学部ニュース編集委員会  
〒514-8507 津市江戸橋2-174  
国立大学法人 三重大学医学・病院管理部  
TEL. 059 (232) 1111 (代表) FAX. 059 (232) 7498  
E-mail : s-soumu@mo.medic.mie-u.ac.jp